

天理市埋蔵文化財調査概報

平成15・16年度（2003・2004年）

2009

天理市教育委員会

例　　言

1. 本書は、天理市教育委員会が平成15年度および16年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。本概報には日次に示した遺跡についての調査概要を収録している。

2. 調査は、天理市教育委員会文化財課文化財係が実施し、青木勘時(技術史員・現主査)および松本洋明(技術史員・現係長)がそれぞれの現地調査を担当した。

また、現地調査、遺物整理から本書の作成に至るまでに下記の整理補助員、学生諸氏の御助力を得た。記して謝意を表する。

芳村信芳　中森軍之介　中森富美代　河喜多淑子　藤岡早希

石井里英(立命館大学・現美濃市教育委員会)　松本真並(天理大学卒業生)

古出陽(天理大学・現宮崎県埋蔵文化財センター)　福家恭(天理大学・現桜井市教育委員会)

安原貴之(天理大学・岡山大学大学院)　今井和代・村下博美(天理大学)

伊東由実(奈良大学卒業生)

3. 本概報の執筆は、それぞれの調査担当者が分担し、編集は青木がおこなった。

目　　次

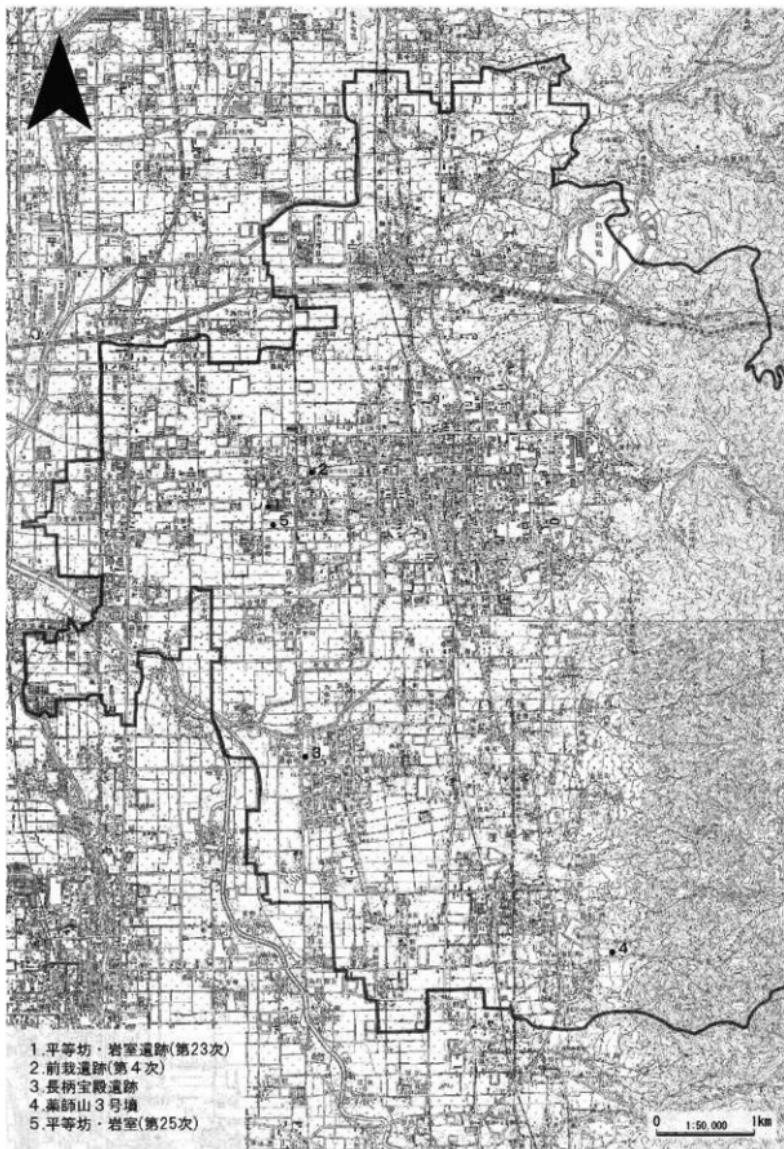
□平成15・16年度調査地点位置図

■平成15年度(2003年)

- | | |
|-------------------------|--------|
| 1. 平等坊・岩室遺跡(第23次) | (青木) 1 |
| 2. 前堀遺跡(第4次) | (青木) 9 |

■平成16年度(2004年)

- | | |
|-------------------------|---------|
| 1. 長柄宝殿遺跡 | (青木) 15 |
| 2. 薬師山3号墳 | (青木) 21 |
| 3. 平等坊・岩室遺跡(第25次) | (松木) 25 |



平成15・16年度 発掘調査地点位置図

平成 15 年度

(2003)

1. 平等坊・岩室遺跡（第23次）－平等坊町

I. はじめに

平等坊・岩室遺跡は天理市の中央部に所在する弥生拠点集落である。地理的には奈良盆地東部に位置し、盆地東部山麓の谷筋から派生して市域を西向きに流れる布留川により形成された扇状地下方の沖積平野に立地している。

遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mと推定され、これまでに遺跡北半部を中心に実施された20次以上に及ぶ調査の成果により弥生環濠集落の終焉から古墳時代集落への移行に至るまでの集落様相の変遷過程が確認されている。

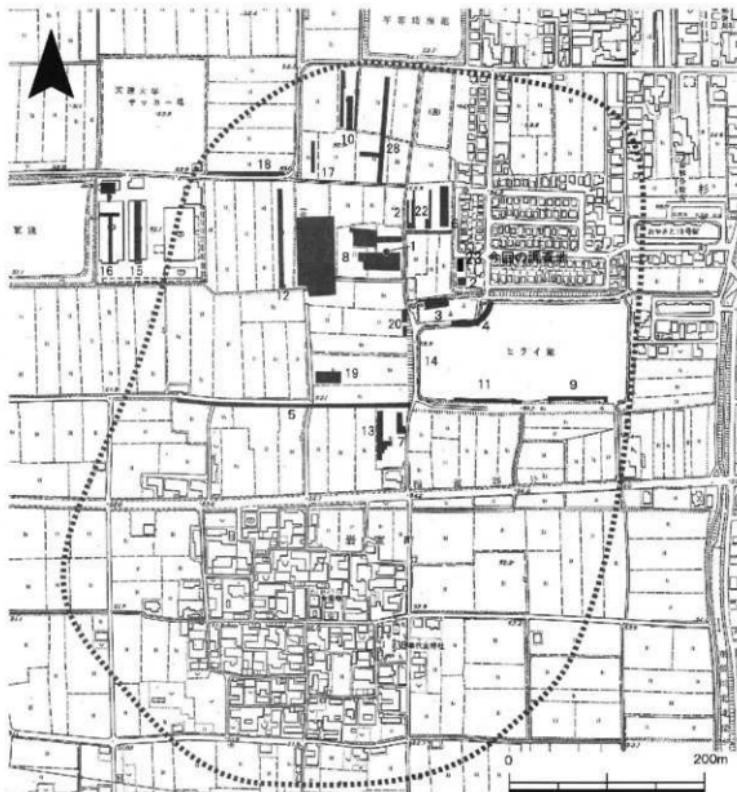


図1 今回の調査地とこれまでの調査地点 (S=1/5000・数字は調査字数を示す)

II. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

今回の調査は山辺広域行政事務組合（天理消防署）による防火水槽建設を契機として実施した。調査地は昭和45（1970）年の第2次調査にかかる造成地（現在の小林住宅団地）の範囲にあり、当時の調査では弥生中期の環濠等を検出した調査区に近接した地点に該当する。現在は公園（若葉公園）としての土地利用がされており、この公園北側の防火水槽設置範囲における発掘調査を進めることとなった。

2. 調査の方法と経過

調査地の現状は宅地造成後の住宅地の一角となっており、周辺地域の水田面より約1.7mの比高差で造成上の客土がなされていた。そのため予想される遺構検出面までに約2m以上の深度での掘削が必要とされることから、防火水槽建設工事に際しての鋼矢板打ち込み後にその周郭内における発掘調査を実施することになった。

調査区は公園北西側に位置し東西5.5m、南北11.5mの範囲に限定された。重機による造成土除去後の旧耕作土上面以下を主として人力掘削により掘り下げつつ層序確認と遺構検出に努めた。実際のところ、人力のみでは下位の調査区内から調査区外の現状地面への排土に困難が生じ、調査区内南端に一旦は排土の仮置きをしながら全体の約2/3までの調査進行後に途中重機による排土も加えながら全域の調査を進行、完了した。現地における調査は平成15年10月23日より開始し、同年11月22日までにすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は約60m²であった。

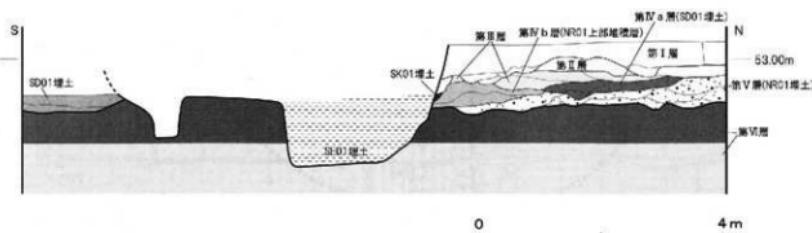
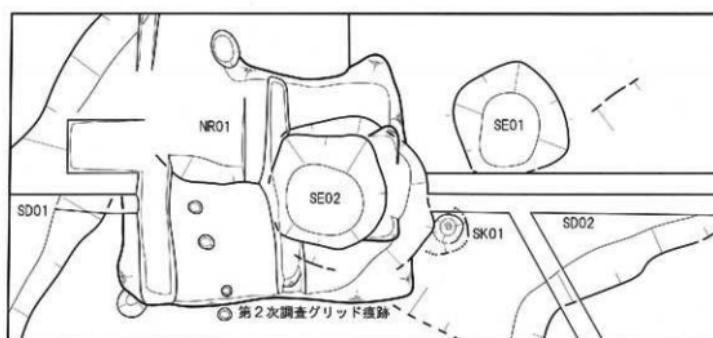


図2 調査区平面・土層図 (S=1/80)

III. 調査の概要

1. 層序

調査区中央の南北方向に残した土層観察用のアゼから、以下のような基本的な層序を確認している。

調査区が鋼矢板による囲郭内部の狭小な範囲に限定されたため、ここでは簡単に明示するものとする。

第Ⅰ層：旧耕作土。宅地および公園造成以前の水田面を示す。上面は標高約53.3m付近に相当する。

第Ⅱ層：旧床上。にぶい黄褐色混じり粘質土である。

第Ⅲ層：灰黄褐～黒褐色混じり粘質土からなる遺物包含層である。弥生中期末～古墳前期の土器片が多く含まれていた。

第Ⅳa層：褐灰～灰黄褐色砂質土。溝SD02埋土に相当する。

第Ⅳb層：明黄褐色砂混じり粘土質シルト。下位の自然河道の上部堆積層である。

第V層：黄褐～暗灰黄色粗砂混じり砂質土・粘土質シルト。自然河道NR01埋土である。

第VI層：黄褐～緑灰色微砂・粘土質シルトからなる基盤層（地山）である。下部は硬質な暗緑灰色粘土となっていた。

2. 検出遺構

第2次調査グリッド痕跡：調査区南半の旧耕作土上面より検出された一辺約4mのほぼ方形の調査区（グリッド）痕跡である。位置関係と当時の記録により昭和45年に実施された確認調査のための調査区痕跡であることが知られる。数カ所に土層断面観察のための東西方向の断ち割りが見られ、層序と遺構検出面との関係を追求した苦労の跡が見える。旧グリッド内では、自然河道NR01のみ完掘されていたが時期的に後出の井戸SE01は検出後に埋土上半のみの掘削で終わられていた。埋め戻した埋土からはコンテナ約4箱分の多量の土器、石器類が出土しており、確認のみに主眼を向けざるを得なかった当時の調査状況が窺える。

溝SD01：調査区の南辺で検出した北西～南東に斜行する溝である。幅約1.8m前後を測る。深さは検出面より約0.4m弱で、断面形は浅い皿状の逆台形を呈する。埋土は黄褐～暗緑灰色砂混じり粘質土・シルトで少量の弥生中期中葉～後半の土器片等の遺物が出土している。

溝SD02：調査区北半東寄りで東肩のみ検出した北西～南東に斜行する溝である。西肩は未確認であるが溝幅は約3m前後と推測される。深さは検出面より約0.3m前後、断面形は浅い半円形を呈する。埋土は褐灰～灰黄褐色砂質土を基調とし（基本層序の第Ⅳa層に相当）、遺物は少量の弥生後期前半～末の土器片が出土している。

土坑SK01：調査区中央付近で検出した土器埋納土坑である。径約0.8mのほぼ円形の平面形を呈し、深さは埋納土器検出面上端より約0.35mを測る。埋土は明黄褐色粘土質シルトの単層であり、土坑の底面直上に直口壺を正置し、埋土の充填をおこない埋納した様子が窺える。埋納された直口壺は弥生中期中葉の時期が考えられる。検出時には口縁端を欠損していたが胴部内より欠損部の破片が出土したため、口縁の打ち欠きの後収納し、土器本体の埋納がおこなわれたと推測できよう。また、底部底面および胴部下半の底部付近の外面にも焼成後の穿孔が見られ、これらの状況から何らかの祭祀行為の後に埋納された土器であることにまちがいない。

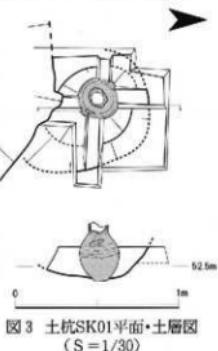


図3 土坑SK01平面・土層図
(S = 1/30)

井戸SE01：調査区西北で検出したやや隅丸方形に近い平面形を呈した素掘り井戸である。最大径約1.8m、検出面よりの深さ約0.9mで遺存する。埋土は上半が褐色粘土質シルト、下半から底面直上までが灰～暗灰色の砂混じりシルト・粘土であった。埋土下半の上面付近より下位にかけて多くの板材が出土しているが、その中には先端を矢板状に整えた板材も含まれ、部分的に土坑底面の周囲に打ち込まれた状況での遺存が確認できた。これらの板材は井戸の内側周囲の護岸のため打ち込まれたものと思われるが、他の板材が横方向に積まれたことも想定できる状況であった。明確な横板組みの井戸ではないが、弥生後期初頭の時期から考えた場合には非常に希少な事例と言える。他に遺物ではコンテナ約1箱分の弥生中期末～後期初頭の土器片と少量のサヌカイト製石器類が出土している。

井戸SE02：調査区のほぼ中央に所在する素堀りの井戸である。先述の昭和45年度調査グリッド内で未掘のまま残されていたもので今回の調査では埋土下半から底面付近までの完掘をおこなった。ほぼ円形の平面形を呈し、径約2.5m強を測る。深さは約0.9mで断面形状は逆台形を呈する。埋土は上半が暗灰色粘土質土、下半が植物層混じりの腐植土を介在する灰黒色粘土となっており、出土遺物の多くは下半埋土からの出土である。コンテナ約1箱分の土器片とともにサヌカイト製石器、石包丁等の破片が出土しており、いずれも弥生中期後半～末の時期におさまるもので占められている。

自然河道NR01：調査区全域の2/3ほどの範囲に堆積する砂層堆積である。調査区内では東岸肩のみを検出しておらず、北東～南西の流路方向のみが知られる。深さ0.4～0.7mを測り、埋土下半の粗砂層上部砂質土壤の堆積（基本層序の第IV層より下位の堆積層に相当）からは少量の縄文晩期末・弥生前期～中期中葉の土器片が出土している。

3. 出土遺物

調査においては、遺物包含層や各構造の埋土から弥生前期～古墳時代前期の土器を主体にサヌカイト製石器や安山岩、結晶片岩等を素材とした石包丁、木製品等も出土している。なお、出土遺物の総量はコンテナにして約15箱であった。

ここでは遺構出土遺物を中心に図示したものについて概観するものとする。土器類の法量、観察については観察表にまとめるごとにし、文中では特徴的な遺物のみ詳述しておきたい。

(1) 土器類

1は縄文晩期突帯文土器の深鉢口縁部片である。内外面ともに摩滅のため調整等は不明である。外面口縁端部直下と頸部付近に貼付突帯が巡る。上位の突帯は刻み目が無く粘土帶の貼付のみであるが、頸部では明瞭な刻み目が見られた。調査区中央南付近の第IV層より出土している。

2は弥生中期中葉のほぼ完形品となる直口壺である。やや内湾気味の口縁部と細長い胴部を形態的な特徴とする。外面では口縁端部付近および胴部最大径となる部分にのみ櫛描き波状文を、頸部から胴部上半にかけては6条の櫛描き直線文が巡らされている。底部底面および底部付近の側面には焼成後の穿孔が見られた。土坑SK01に埋置されていた壺である。

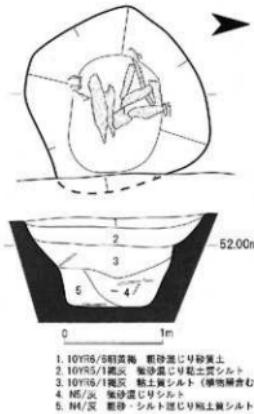


図4 井戸SE01平面・土層図(S=1/50)

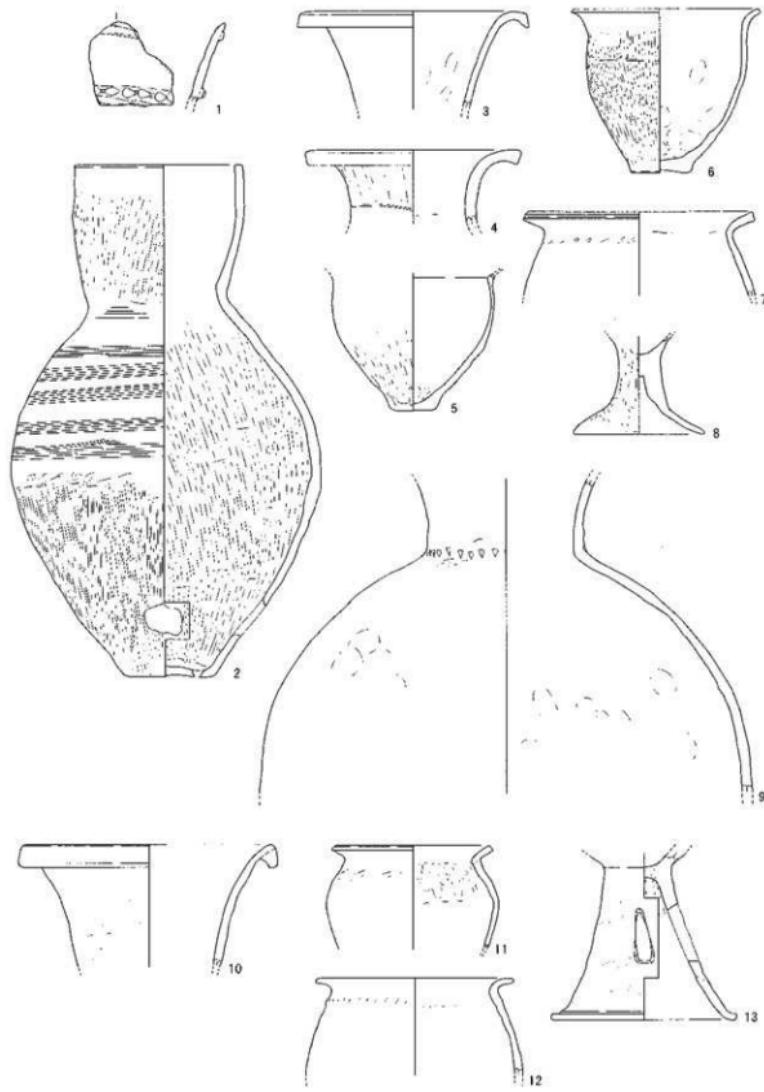


図5 山土遺物実測図1 (S=1/4)

3～9の上器はそれぞれ調査区北半西側の後述する井戸SE01上部にレンズ状に堆積した第Ⅲ層遺物包含層下部から遺構埋土上面にかけて出土した土器である。3・4は広口壺の口縁部片である。3の口縁部外端面には櫛描き波状文が巡らされている。4の頭部付近にはやや弧状気味に櫛描き直線文が巡る。5・6は壺の胴部あるいは胴部から口縁部までが残る半完形の壺である。5は口縁部を欠くが、底部平底で外面胴部下半には上方へのケズリ調整痕が残る。6は平底で短く屈曲した口縁部を特徴とするが、外面の粗いタテハケと口縁部内面のヨコハケ等の技法的な面から弥生中期大和型壺の新相を示す土器である。7は瀬戸内型壺の口縁部片である。口縁部端面の凹線文と外面頸部に巡る刺突痕が特徴となる。8は高杯の脚部である。杯底部相当の内面側が深い形状を示すことから台付き鉢脚部とも考えられる。外面側の調整はケズリ調整を主体とする。9は広口壺の口縁部から胴部上半までが残る大きめの破片である。やや開き気味に直立する口縁部形状から広口壺と判断される。外面頸部に刺突痕が巡る。

10～12は井戸SE01埋土上部～上半より出土している。10は広口壺口縁部片である。

11・12は壺の口縁から胴部にかけての破片である。11の瀬戸内型壺の口縁部外端面には凹線文が巡り、体部上半の頸部付近に叩き目、下半にはハケ調整が見られる。12は形態的には大和型壺に類似するものの、外面頸部付近にヘラ状工具端面を原体とする櫛齒状列点が巡り人和型と瀬戸内型の折衷的様相が見られる壺である。13は井戸SE01埋土下層より出土した高杯である。円錐状に裾広がりとなる脚部形状を呈し、外面には丁寧なミガキ調整が施されている。また、脚部には涙滴形の透かし孔が穿たれる。

14～17は井戸SE02埋土出土の土器である。若干の上部堆積層出土土器が混じるもの古相の十器が井戸の廃絶時期を示すものと思われる。14は壺の胴部から底部にかけてのみ残る破片である外面のミガキに見られる分割施文や胴部形態からおそらく弥生後期の長頸壺と考えられる。15は内傾した口縁部の外面上下端に凹線文が巡る鉢である。外面にわずかにミガキが残る。16・17はとともに高杯の脚部である。16はやや大型で、17はやや小振りな高杯の脚部である。いずれも小円孔が複数穿たれている。

18～24は一部第Ⅰ・Ⅱ層の上部堆積層出土も含むがほぼ第Ⅲ層遺物包含層出土の土器である。いずれも古墳前期初頭～前半期の布留式土器を主体とする上器群であり、溝SD02埋没過程での上部堆積層に相当するものも含まれている。

18・19は二重口縁壺である。18は頸部が長く直立気味で口縁部も立ち気味に開く二重口縁壺である。全体的なバランスから肩が張る長胴の形態を呈したものと思われる。19は頸部から一次口縁まで残る破片である。頸部付近に丁寧なヨコミガキ調整が施されることから、前記の18の壺に比べて調整面では精製品としての特徴が見られた。20は小型丸底壺の小片である。体部が小さく口縁が外上方に大きく延びる小型丸底壺としては古相の形態を呈し、外面にはわずかに精緻なヨコミガキが残る。21～23は布留型壺である。いずれも内湾下した口縁の端部が内面側に小さめに丸く肥厚する特徴が見られる典型的な布留型壺である。外面胴部上半にはヨコハケが施され、内面はケズリ調整されている。24は東海系S字状口縁台付き壺の脚台部分の破片である。脚台下端には粘土紐の折り返し手法が認められる。色調、胎土から伊勢湾沿岸地域よりの搬入品と考えられる。

(2) 木製品

25・26は井戸SE01の底面に打ち込まれていた矢板である。埋土中に崩壊した状況で多数の矢板が出土しているが、ここではほぼ完存した2点のみ図示した。

25は長さ64.9cmほどが残存し、上端は折損している。最大幅13.1cmを測り、厚さは1.2～2.6cmである。先端はわずかに欠損するが手斧状の工具による加工が施され、下端に向かって厚さ1.1cmと薄く仕上げ

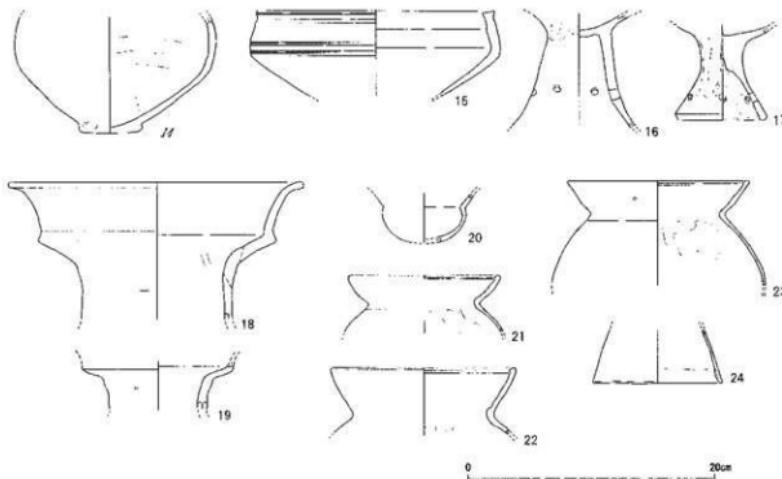


図6 出土遺物実測図2 (S=1/4)

られている。26は現存長58.8cm、最大幅12.8cmを測る。左右対称な形態の25とは若干異なる形態を呈し、下端付近には片側測線を急角度に先端に向けて削り出している。その際の加工痕も表裏両面と側面に明瞭に観察され、鉄器使用の痕跡が看取される。そのため先端付近の厚さは0.7~1.5cmと薄くなっている。

これらの矢板状木製品はすべて同様の針葉樹木材を使用しており、樹種は鑑定をおこなっていないため不明である。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法 量		残存率(口縁)	備考
					口径・底径	器高(残存高)		
1	深鉢	7.5YR7/4にぶい緑	やや粗	やや良好	—	—	—	裏文鏡類参考
2	壺	7.5YR8/6灰黄緑	密	良好	13.6	41.8	ほぼ完存	
3	壺	7.5YR7/4にぶい緑	やや密	良好	16.0	8.0	1/3	
4	壺	7.5YR6/6緑	粗	良好	17.6	6.2	1/4	
5	甕	7.5YR6/4にぶい緑	密	軟質	3.6	11.2	2/3	
6	甕	10YR8/4灰黄緑	密(小石混じり)	やや良好	11.8	13.4	1/3	
7	甕	10YR8/4灰黄緑	密	良好	18.2	6.8	1/4	
8	高杯	2.5YR5/9明赤褐	所	良好	10.2	8.0	頭部ほぼ完存	
9	壺	10YR8/4灰黄緑	密(小石混じり)	良好	—	25.7	頭部~副部1/2	
10	壺	7.5YR7/0緑	密	良好	20.0	10.0	1/2	
11	甕	5YR5/4にぶい緑	やや粗	やや軟質	12.4	8.5	1/4	
12	甕	5YR6/6緑	やや粗	良好	15.0	8.0	1/4	
13	高杯	2.5YR5/1灰	密	良好	14.8	13.7	頭部完存	
14	壺	10YR6/3にぶい緑	密	やや良好	4.0	9.5	底部残存	
15	鉢	7.5YR8/1褐色	密	良好	19.0	7.0	1/4	
16	高杯	7.5YR3/1黒褐	密	良好	—	9.2	脚柱両のみ残存	
17	高杯	10YR6/1褐色	密	良好	6.8	7.8	脚部完存	
18	二重口縁壺	7.5YR7/4にぶい緑	密	やや良好	23.6	10.0	口縁部~頭部1/2	
19	二重口縁壺	5YR6/6緑	密	良好	—	3.9	頭部1/4	
20	小型丸腹壺	5YR6/6緑	密	良好	—	4.0	1/4	
21	甕	10YR6/4にぶい緑	密	良好	11.8	4.7	1/4	布密型要
22	甕	10YR7/3にぶい緑	密	良好	14.8	5.4	1/8	布密型要
23	甕	7.5YR7/3にぶい緑	密	良好	14.0	8.5	1/4	布密型要
24	甕 脚台	5YR8/3淡緑	密	良好	10.4	4.3	1/6 2点・1/4 1点	底面S字型

表. 出土遺物観察表

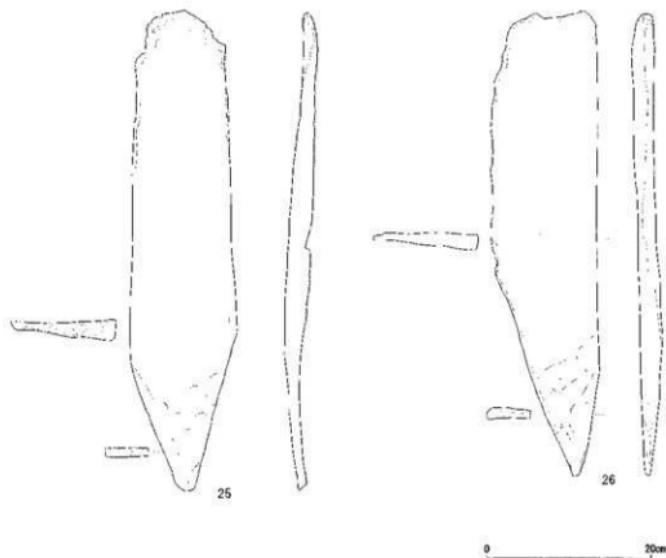


図7 土遺物実測図3 (S=1/6)

IV.まとめ

ここでは今回の調査地において検出、確認された遺構群の変遷をもとに集落北東縁辺における集落景観の復元について考え、調査成果のまとめにかえておきたい。

今回の調査で検出された遺構群のうちで最も時期の遅いのが自然河道NR01である。平等坊・岩室弥生集落の北東縁辺では幾条もの自然河道痕跡がこれまでにも確認されているが、ここでもやはり本天は低湿地地帯であったことが窺えた。時期的には縄文晩期以前から弥生前期までが該当する。

その後は自然河道埋没後の弥生中期前半～中葉には集落縁辺の居住域としての土地利用が知られ、土坑SK01の埋納上器に見られるような祭祀痕跡がおそらく集落外縁の洪水や浸水に対しての地鎮のための供獻行為の現われとして残されたと思われる。また、環濠集落の発展により弥生中期後半には多段環濠が巡らされ、従前の第2次調査検出の環濠のすぐ北側にあたる今回の調査区においても溝SD01が検出された。

弥生中期後葉以降には調査区全域が居住域として変質しており、そこには集落外縁に特有な井戸の掘削も認められた。井戸SE01およびSE02がこれに該当し、若干の時期を隔てつつ連続的に近接した状況に掘削されている。

次に、これら弥生中期以降拡大化した生活圏の終焉を迎えて以後の弥生後期後半以降には環濠とは判断のつかないものの水路状に溝SD02が開削され、おそらく周囲の低地から集落内部への取水、排水のために供されたと考えらう。

以上のように、今回の調査では小面積にもかかわらず、数時期にわたる遺跡群の検出とその変遷が明らかとなった。今後もこうした集落縁辺の調査事例の蓄積から弥生環濠集落周縁における景観復元を考えてゆきたい。

2. 前栽遺跡（第4次）—前栽町

I. はじめに

前栽遺跡は、天理市内を西流する布留川下方の扇状地に立地する縄文晩期から奈良・平安期にかけての複合遺跡である。これまでの発掘調査では、遺跡北部の前栽小学校内での調査（第1次）で自然河道より多量の縄文晩期突堤文土器片、東部のマンション建設にかかる調査（第2次）では弥生前・中期および古墳中・後期の溝、奈良・平安期の井戸等の遺構と遺物が検出されている。

今回の調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として実施したものである。建設工事にかかる直前においての発掘調査であったため、極めて時間的に制約された状況下で調査を進行した。

調査は、敷地内における宅地間道路部分に幅4mを基調とする南北方向の調査トレンチを2ヶ所に設定して実施し、調査対象地内の遺構、遺物包含層の有無確認に努めた。

現地における調査は、平成15年12月15日より開始し、同月17日に終了した。総調査面積は約500m²であった。

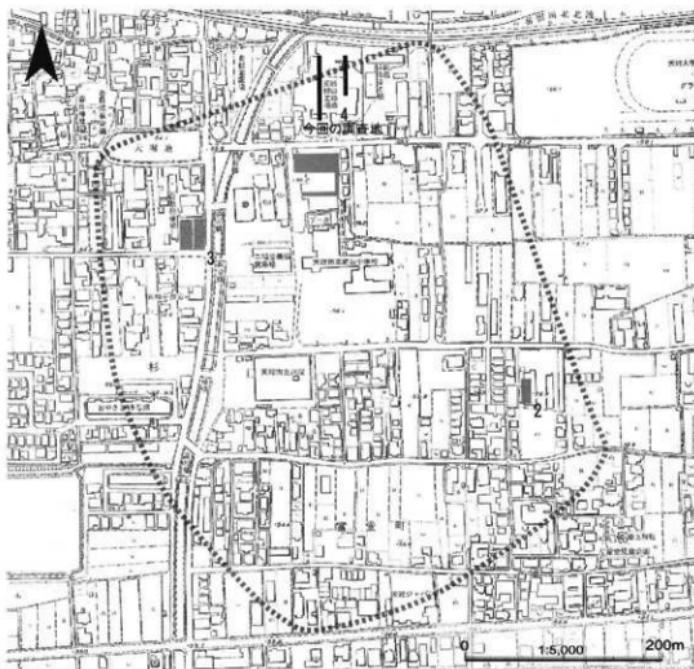


図1 今回の調査地とこれまでの調査地点 (S=1/5000・数字は調査字数を示す)

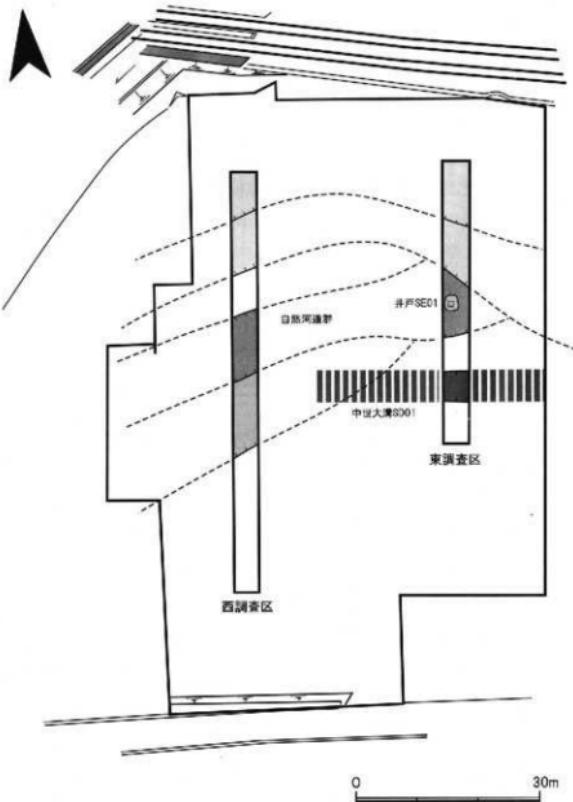


図2 調査区平面図 (S=1/800)

II. 調査の概要

1. 層序と検出遺構

(1) 層序

東西2ヶ所のトレンチ調査区では、ともに表層には厚さ0.5~1.0m近くにおよぶ造成土の客土あり、以下に旧耕作土が全域に見られた。耕作土より下位では、西調査区南端から東調査区全域にかけて床土層が部分的に存在したが、それ以外の調査地半では耕作土直下に砂質土や砂、シルト、粘土の互層堆積などが主体となり、旧河道群の重複が見られるような低地部の様相を呈していた。安定した基盤層の存在は調査地の南東側に限定される状況であったが、西調査区南側付近と東調査区南半では、わずかに弥生時代から中世にかけての層厚0.2mほどの遺物包含層を介在し、以下は粘質土、粘土の基盤層が続いていた。各調査区の堆積層序の詳細については、図3の柱状土層図に示したような状況となっている。

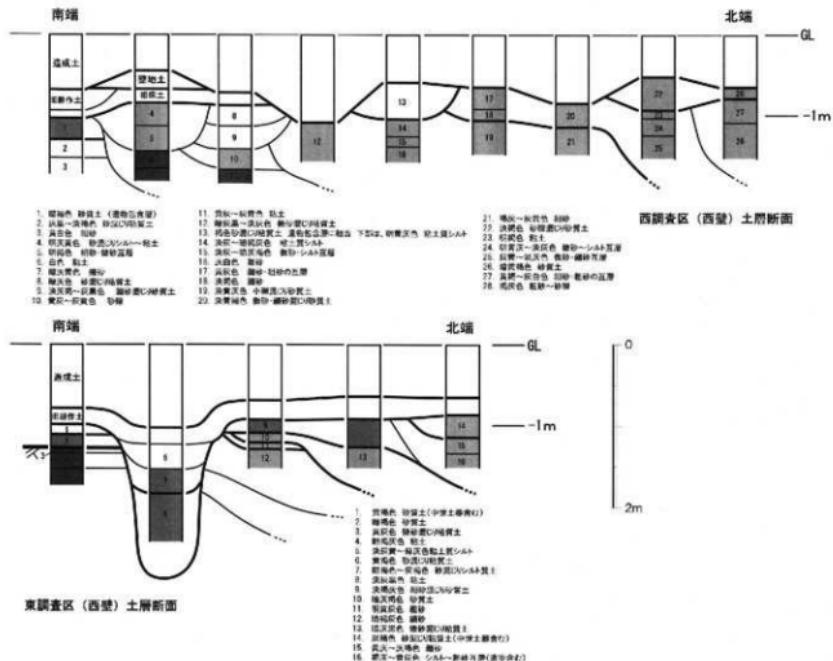


図3 調査区土層図 (S=1/60)

(2) 検出遺構

西調査区では、層序の項で述べたように調査区の北から南側にかけて全体の2/3近くが砂層堆積による自然河道群であった。ここでは土層断面の観察から3~4時期に重複した自然河道群を検出しているが、調査区北部検出の河道埋土上面にのみ中世以降の土器片を主体とする遺物小片の出土を確認しているに過ぎない。

東調査区では、北半および中央付近までに西調査区北部と同様の自然河道群を検出している。ここでも、北半部の自然河道の上面でわずかに中世土器片が出土しており、中央付近の河道堆積では弥生前期末頃の土器片が数点出土を見ている。また、安定した基盤層せんが確認された調査区南端付近においては、条里地割に伴う区画溝的な東西方向の大溝SD01を検出している。大溝SD01は、検出時の上面幅約5.0m、深さ2.0m以上で断面逆台形を呈する大溝であり、埋土より中世末期を下限とする土師器、国産陶器類などがあわざかに出土している。

東調査区中央の井戸SE01は、前述の中央付近の河道堆積の上面で検出された立て板組で曲げ物枠をもつ井戸である。一辺1.5mのほぼ方形の平面形を呈する掘り方の内部に約0.8m四方の正方形に板組みをして井戸枠としている。さらに、この井戸枠上部には内側に横板組み一段の方形枠を二重に設けており、検出面からの深さ約0.8mの底面付近にのみ径約0.7mの円形曲げ物枠を置いていた。遺物のほとんど

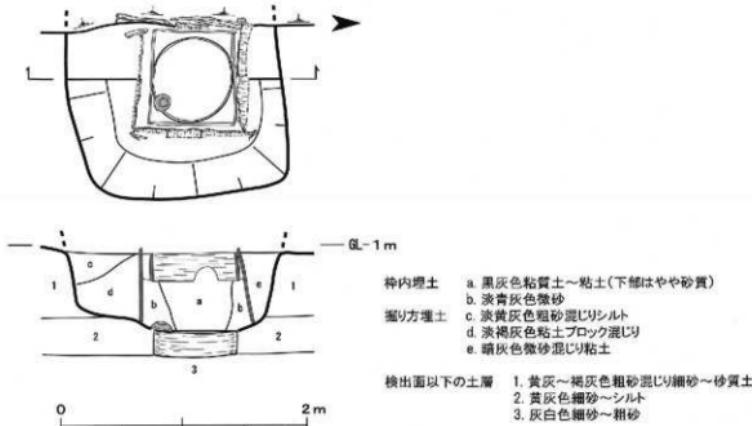


図4 井戸SE01平面・土層図 (S=1/40)

どは井戸枠内埋土より出土しており、完形品の黒色土器碗や上師器羽釜、小皿などが見られた。これらの遺物の帰属時期より、概ね平安時代初頭～前半期の範疇で使用、廃絶した井戸と考えられる。

2. 出土遺物

今回の調査では、東西の両調査区全体での遺物出土量は少なく総量コンテナ約2箱分の土器が出土している。内容的には、河道や溝、井戸等の検出遺構から弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、陶器等の土器類がある。以下、図示した土器についてのみ記述しておく。

1は上師質小皿である。復元口径13.6cm、器高2.6cmを測る。外面底部付近に弱い指頭圧が施されるほかは口縁部付近を丁寧にヨコナデ調整している。灰白色の色調を呈し、胎土はきめ細かく密である。西調査区自然河道群埋土上部より出土している。

2は上師質小皿である。復元口径11.2cm、器高2.5cmを測る。外面底部付近に弱い指頭圧を加え、その他は口縁部から内面見込み近くまで丁寧なヨコナデ調整を施している。浅黄橙色の色調を呈し、胎土には細かい砂粒を含む。東調査区自然河道群埋土上部より出土している。

3は上師質小皿である。復元口径10.8cm、器高2.2cmを測る。外面底部には強い指頭圧を加えたために生じた凹凸が見られ、口縁部付近も強くヨコナデしている。にぶい黄橙色の色調を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。

4は国産陶器の花瓶である。胴部から頭部にかけて急激に窄まる形態の花瓶であり、脚部付近の口径が大きく安定した形状を呈する。外面には灰白色の釉が施され、内面には胴部にロクロナデ、底部付近に指頭圧痕が見られる。また粘土帶の接合痕も明瞭に残り、内面は無釉である。3・4はともに東調査区大溝SD01埋土より出土している。

5は弥生前期末頃の壺である。底部から胴部にかけて残る破片であるが、外面に見られる多条化したヘラ描き沈線による装飾から帰属時期の一端を知ることができる。また、外面底部付近のヘラ描き沈線の直下に小さな円形刺突文様が巡らされる点も特徴となる。底径5.4cm、現存高10.2cmを測り、灰黄色

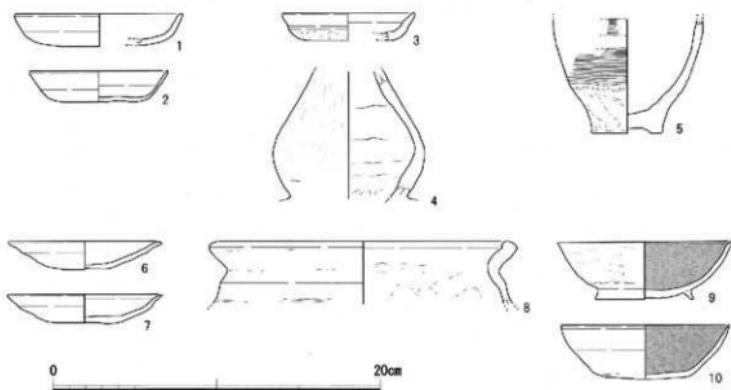


図5 出土遺物実測図 (S-1/3)

の色調を呈する。東調査区自然河道群中央河道の河岸より出土している。

6・10は、井戸SE01井戸枠内埋土出土の平安期初頭～前半の土器類である。

6・7は土師質小皿である。浅く偏平な体部形状の小皿であり、口縁部の端部付近ではやや外側に屈曲する部分的特徴が見られる。外面底部には弱い指頭圧痕が残り、その他は全体的にヨコナデにより成形されている。6は復元口径12.5cm、7が復元口径12.7cmで器高はともに2.3cmとほぼ同規模、同形態の規格が認められる小皿である。いずれも色調は淡黄灰色を呈し、胎土もきめ細かく密と同様な在り方を見せていている。

8は土師質羽釜である。鍔より上位の口縁部のみ残る破片である。全体的に器面は厚く、口縁端部の形状も丸く鈍い印象の羽釜である。外面の鍔部上位付近のヨコハケと内面の板ナデ圧痕等の調整痕以外では口縁部内外面でのヨコナデが見られる。また、外面にのみ粘土紐接合痕が残る。復元口径25.2cm、現存高5.1cmを測り、にぶい橙色の色調を呈する。胎土にはわずかに小石、細砂が含まれている。

9・10は底部付近の形状が異なるが、とともに黒色土器の碗である。9は底部に高台が付され口縁端部が屈曲、内傾する碗である。外面には明瞭なケズリ調整痕が残り、内面では丁寧なミガキ調整が施されている。また、内面全体に炭素吸着による黒色処理が施され、一部外面口縁部付近にまで及んでいる。高台付近の接合部では内外面ともに丁寧なヨコナデが施されている。黒色処理された部分を除き、全体的には明橙色の色調を呈する。胎土には細かな砂粒がわずかに含まれている。復元口径14.2cm、器高4.7cmを測り、ほぼ完形の碗である。井戸枠内曲げ物枠直上で出土している。10は高台を付さない形態の碗である。外面は基本的にナデ調整で仕上げているが、内面には丁寧なミガキ調整が施されている。内面にのみ黒色処理が施されており、口縁部付近には外面側にわずかに黒色化する部分が見られる。外面側の色調は明黄褐色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。復元口径13.8cm、器高4.4cmを測り、ほぼ完形に近い碗である。

III. まとめ

今回の調査では、調査対象地の南東より南側に安定期盤の拡がりを確認しているが、この近辺での造構面の削平は著しいものと考えられた。井戸の検出地点のように自然河道埋没後に奈良～平安期の集落が営まれたことが想定されるが、今後も当調査地の周辺では散在して遺存した当該時期の造構検出が見込まれよう。

また、調査で確認された自然河道群中で最も時期的に遡ると考えられるものが弥生前期以前であり、その後は流路方向を変化しつつ中世前半頃まで同様の自然環境が継続する点などを考慮すれば、当該調査地点付近が微高地縁辺に近く、想定される前裁遺跡の弥生～奈良・平安期の集落北側縁辺となることが考えられた。こうした点からも、今回の調査により前裁遺跡の北限の状況を知ることができたものと思われる。

平成16年度

(2004)

1. 長柄宝殿遺跡 -備前町-

I. はじめに

今回の調査は、天理市南部の西長柄町に所在する天理市長柄運動公園の拡張に伴う確認調査として実施したものである。当該調査対象地は奈良県および天理市遺跡地図に記載の「周知の遺跡」に該当しないものの、西側に隣接して古代の官道である「中ツ道」の推定ラインが位置している。そのため、敷地内における遺構、遺物包含層の存在と遺跡の有無確認を目的とした発掘調査を進行した。

なお、運動公園拡張にかかる地域は備前町の範囲に含まれるところであり、現状では近年まで耕作地のままであった。

調査は、平成16年6月8日より開始し、同年9月9日までにすべての調査にかかる作業を終了した。調査対象地内の総調査面積は約1700m²であった。

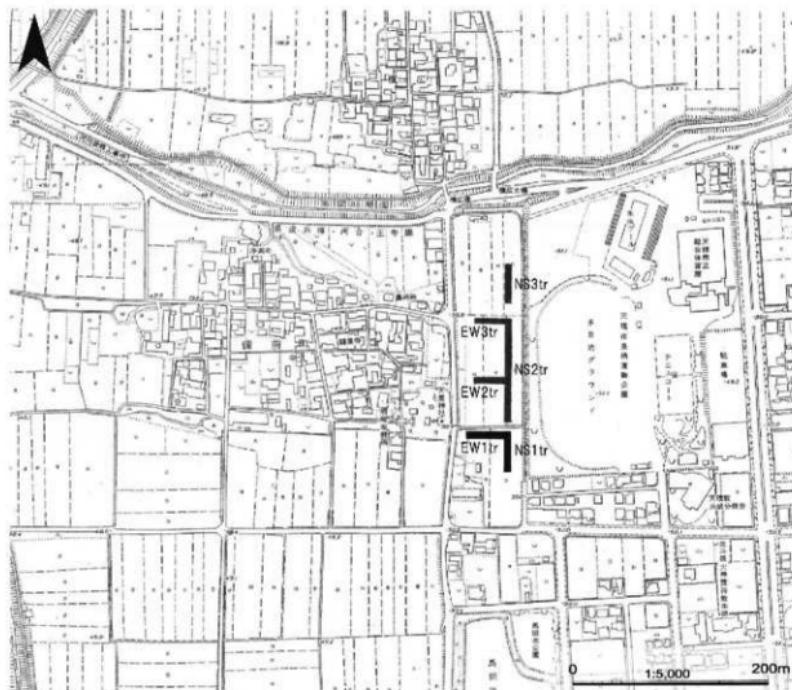


図1 調査地点位置図 (S=1/5000)

II. 調査の概要

1. 調査の方法と経過

調査対象地は東西幅300m、南北幅80m前後と広大な敷地面積であったため、発掘調査にあたっては調査地内の縦横に幅6mを基調としたトレンチを6ヶ所に設定して遺物包含層と遺跡の有無確認に努めた。南北に長く広大な調査地の北、中央、南の各地区におけるトレンチ調査では、結果的に中央地区南端から南地区全域にかけてのみに遺物包含層と遺構の遺存を確認することができた。しかしながら北地区から中央区にかけては現地表面下約0.7~1.0mで遺物包含層を介在せずに地山面あるいは河川状堆積となり、その直上から現在にいたるまでに連綿と続く耕作面を確認している。そのため、遺物包含層と遺構の存在を確認できた南地区のみを本格的な遺構確認の対象としてその後の調査を進めることとなつた。

なお、今回の調査契機である運動公園拡張工事においては盛土造成が主体となる工事内容であったため調査区の拡張による面的な調査はおこなわず、前記の調査トレンチ幅のままに検出遺構の確認のみで調査を終えることとなった。

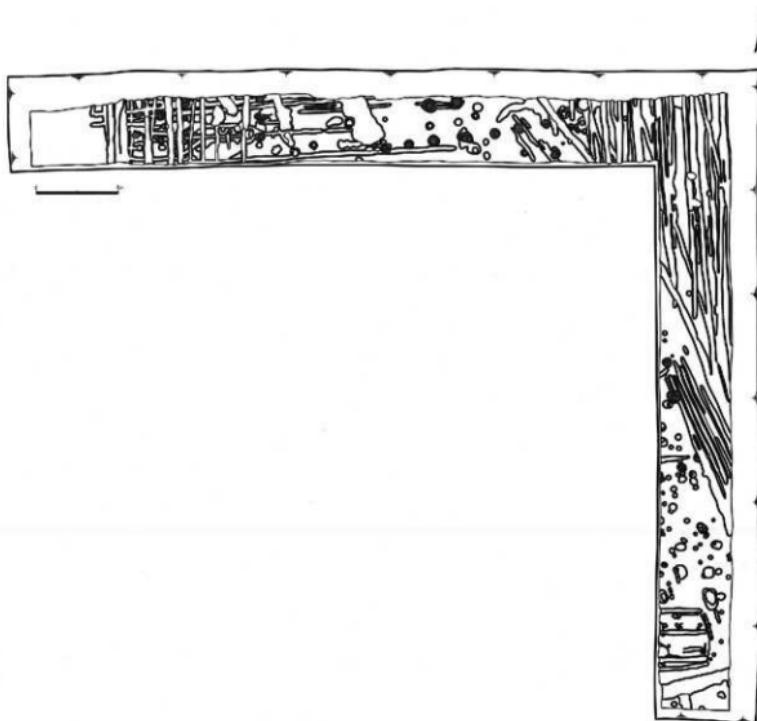


図2 南地区調査トレンチ [EW1trおよびNS1tr] 平面図 (S=1/300)

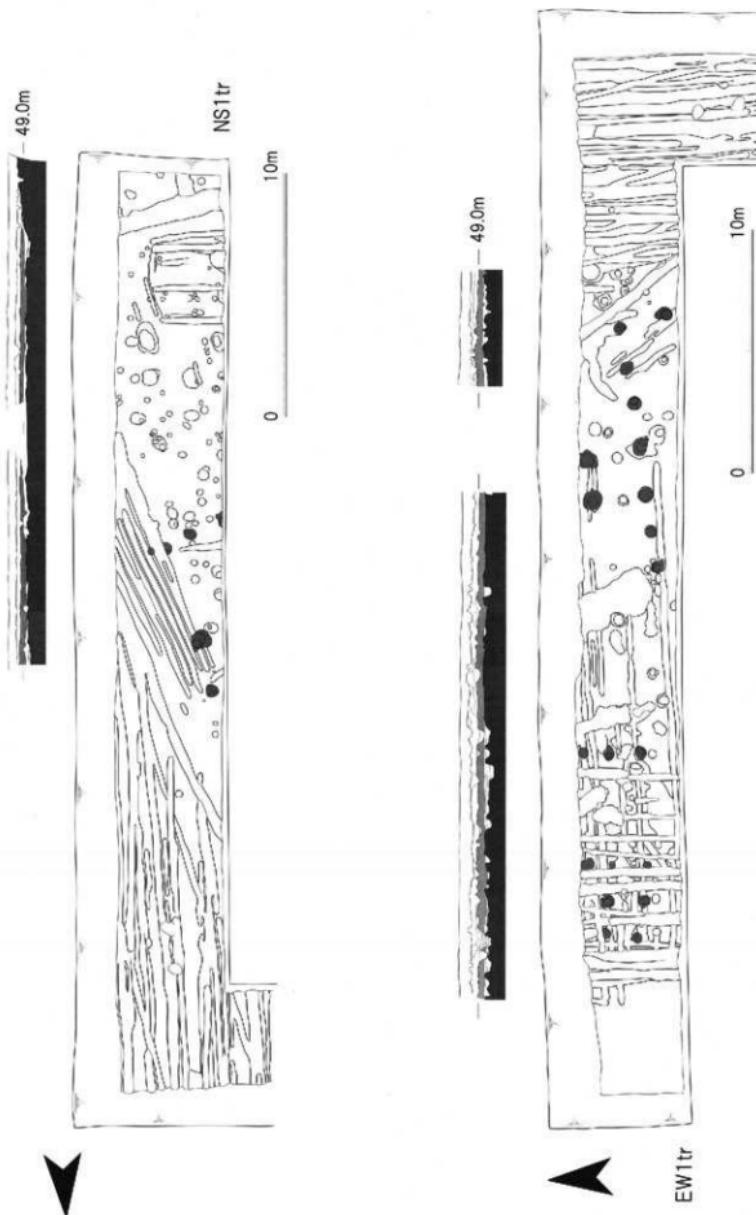


図3 南地区各トレンチ平面・土層図 (S = 1/200)

2. 基本層序

南地区の調査においては、南北方向のNS1トレンチと東西方向のEN1トレンチの2本のトレンチ調査区をL字状に配置して調査、層序確認をおこなった。

ここでの基本的な堆積層序としては、現状地表面以下0.5mまで耕作土（第I層）が続き、以下に床土（第II層）が層厚0.2m平均で全体的に分布する。NS1トレンチ南端付近では耕作土直下で明黄褐色砂質土～シルト・粘質土を基調とする地山（第IV層：基盤層）が標高49m付近で見られたほかは南地区では全体的に南東から北西に向かい標高48.6m付近の高さまでに地表面が緩く傾斜し、上部に灰黄褐色～ぶい黄褐色粘質土（第III層：遺物包含層）を介在するかたちとなる層序を確認している。第III層の遺物包含層は、層厚約0.3m平均で全体的に分布し、直下の第IV層（地山・基盤層）の上面で素掘り小溝群（一部方格地割りに乗る小溝群は第III層を掘り込み面とする）や柱穴、土坑等のその他の造構のほとんどを調査の進行上の都合で検出するに至っている。

3. 検出造構と出土遺物

（1）検出造構

南地区各トレンチで確認された造構のほとんどは前述のように便宜上は第IV層（地山・基盤層）上面のみで検出しておらず、数時期にわたる造構群の重複を同一面で確認する結果となっている。

検出造構のうち、調査地全体に広範囲にわたって存在するのは素掘り小溝群のみであるが、この小溝群には、東西、南北および北西～南東方向の斜行溝の三種が見られた。これら小溝群の重複関係からそれぞれに前後関係があり、斜行小溝群が最も時期的に先行して存在したことがわかった。また、次に東西小溝群、南北小溝群の順に時系列的変化が認められ、地割りから土地利用の変遷を窺い知ることができた。なお、東西、南北の素掘り小溝群は、実際には第III層上面を掘り込み面とすることを土層断面より確認している。

斜行小溝群とその他の掘立柱建物を構成する柱穴、土坑等の造構については第IV層（地山・基盤層）上面が検出手面となっている。また、斜行小溝群は柱穴、土坑に後出し、これ以外の造構のすべてが現状の条里地割に見合うものである点から条里施行以前の地形を反映するものとして捉えらえよう。

それぞれの造構の時期については、上部に堆積する第III層中の包含遺物の時期幅と造構埋上からの出土土器をもとに、掘立柱建物を構成する柱穴、土坑等が概ね奈良・平安前期に、また斜行小溝群が平安後期～鎌倉期の中世前期、東西・南北小溝群が鎌倉～室町期の中世以降に比定することができる。

（2）山上遺物

第III層（遺物包含層）および第IV層（地山・基盤層）上面検出手の各造構より小片、細片を主とする上器類の出土が見られた。その内訳としては奈良・平安期の土器、須恵器、灰釉陶器、瓦類等があり、大半は第III層（遺物包含層）の出土である。また、柱穴等の各造構からは土器、須恵器等の小片のみが出土している。

これら出土遺物の総数はコンテナにして13箱分であった。ここでは、NS1トレンチ中央付近の柱穴群上部の第III層（遺物包含層）出土10器についてのみ提示することにする。

1は須恵器杯蓋である。復元口径11.6cm、現存高3.6cmを測る。外面天井部付近には器高の1/3程度の比率で回転ケズリが施され、ほかはロクロナデにより成形されている。明灰色の色調を呈し、焼成は良好である。全体の約1/4程度が残る破片である。

2は須恵器杯身である。復元口径10.0cm、現存高3.4cmを測る。1と同様に体部外面に器高の1/3ほ

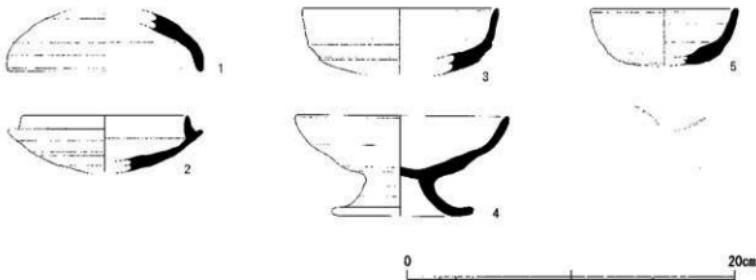


図4 出土遺物実測図 (S=1/3)

どの範囲にのみ底部の回転ケズリが見られる。ほかは全体にロクロナデ調整である。淡灰色の色調を呈し、焼成は良好である。全体の約1/4が残存する破片である。やや偏平な体部と短い立ち上がりを特徴とする。

3は須恵器高杯である。復元口径11.8cm、現存高3.9cmを測る。杯部外面の屈曲部付近には2条の沈線と1条の断面二角形の突帯が巡る。調整は全体的にロクロナデである。明灰色の色調を呈し、焼成は良好である。おそらく長脚二段の高杯となるものである。

4は須恵器低脚高杯である。復元口径12.9cm、復元底径8.6cm、器高6.1cmをそれぞれ測る。やや外開きで浅い杯部とおおきく「ハ」の字状に聞く脚部が形態的な特徴となる。杯部底部附近にのみ回転ケズリ調整が施されるほかは全体にロクロナデ調整による。淡灰色の色調を呈し、焼成は良好である。

5は須恵器杯身である。復元口径10.8cm、器高3.4cmを測る。底部附近にのみ回転ケズリと一部にヘラ切り痕が残るほかは全体にロクロナデ調整である。また、外面底部底面には線刻によるヘラ記号が見られる。淡灰色の色調を呈し、焼成は良好である。

以上の須恵器は、古墳後期から白鳳期にかけてのものであり、概ね6世紀後葉から8世紀初頭頃までの帰属時期で捉えられるものである。

III. まとめ

今回の調査では、調査対象地の西側縁が「中ツ道」に近接することから道路施設そのものに関係する遺構の存在、確認についての期待が少からずあったが、結果的には道路遺構に伴う側溝等は一切確認できなかった。しかしながら、「中ツ道」推定ラインに近接した立地において確認された建物群の存在意義は大きく、時期的に道路との同時併存が考えられる点にも興味が持たれるものであった。

建物群を含む集落そのものの範囲については広大な調査地の南側にのみ限定されるものであったが、未周知な遺跡を新規に発見することとなつたため、小字名より、「長柄宝殿」遺跡として命名しておきたい。



図5 長柄宝殿遺跡の推定範囲と中ツ道
(奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復元図』に一部加筆)

2. 薬師山3号墳 一柳本町

I. はじめに

薬師山古墳群は、天理市東部山麓沿いに展開する柳本古墳群中の史跡柳山古墳の南側に位置する東西に延びた丘陵地上に築造された小規模な古墳群である。径20m前後の小円墳が近接して連なる古墳群であり、概ね古墳後期の築造時期と考えられている。

今回の調査は、当該古墳群中の薬師山3号墳において、墳丘裾付近での陶芸・炭焼き窯の設置を契機とした地形の改変がおこなわれたため、その工事箇所の土層観察、および墳丘裾部確認のためのトレンチ調査を実施したものである。

調査は平成17年3月1日より開始し、3月18日にすべての作業を終了した。総調査面積は約20m²であった。

II. 調査の概要

1. 墳丘測量調査

発掘調査に先立ち、古墳の現状を記録する目的で墳丘部および周辺地形の測量調査を実施した。その

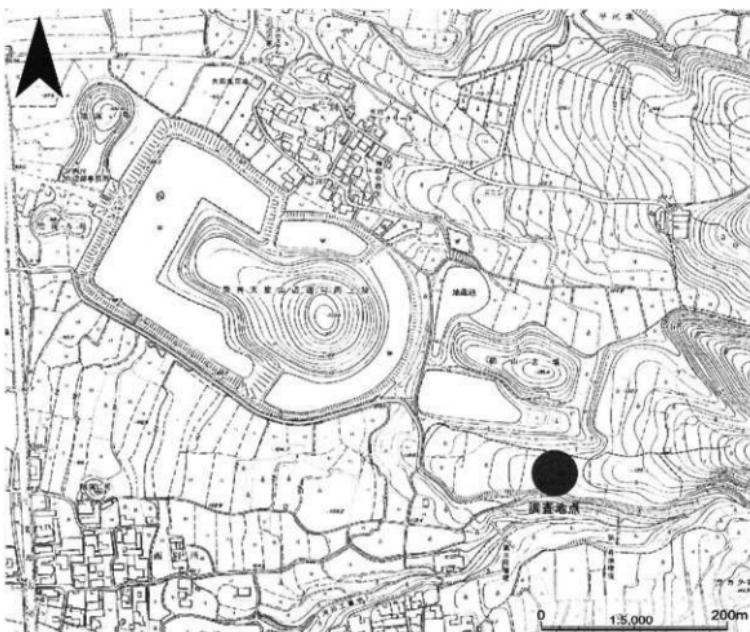


図1 調査地点位置図 (S=1/5000)

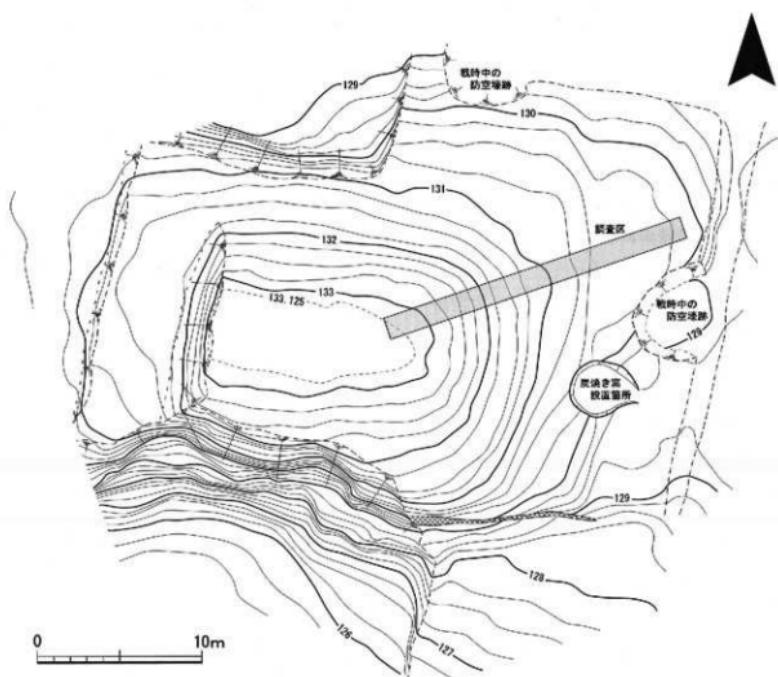


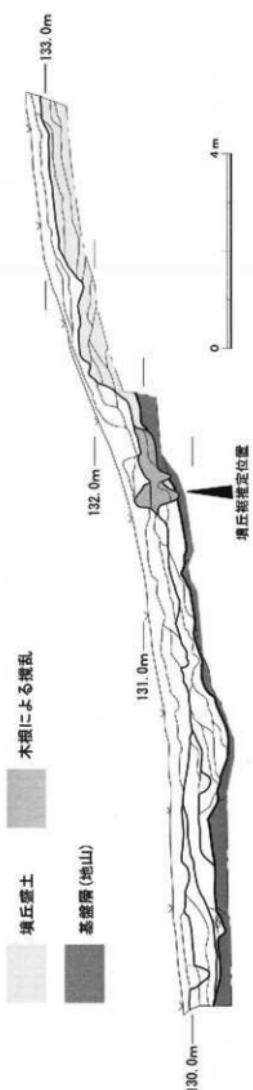
図2 菊師山3号墳と調査区位置図 (S=1/300)

結果、墳丘丘陵の東西両側縁斜面や墳頂部付近では竹林による地形の変化が著しく、平坦面や段状整形面が目立つものの、標高131.5m付近では墳裾相当の傾斜変換点が弧状に巡りテラス状を呈する地形が認められた。これらの成果により、現状の墳丘規模が径25m前後の円墳であることが予測された。

2. 墳丘トレンチ調査

調査では、対象地内の古墳墳頂平坦面から裾部にかけて幅1mを基準とするトレンチを設定し、延長距離約19mの範囲での確認調査を実施した。その結果、墳頂付近では現地表面下約0.5m付近で墳丘盛土が見られ、上部からの木痕による擾乱が著しいものの墳丘測量時の墳裾推定地点の付近で地山面の隆起する斜面地形を確認している。

さらに調査区内の東側では墳丘斜面下方への流出土、二次的な堆積土層と地形改変に伴う客土の堆積層が現地表面下約0.8~1.0mの地山面の上部に見られた。地山直上の堆積土中には、弥生後期~古墳前期の土器片が多く含まれ、さらに上位の客土層では須恵器片も含まれていた。また、墳頂部付近においても上部堆積層では須恵器と弥生土器の混在が見られるものの、下部の墳丘盛土中には弥生後期~古墳前期の土器片のみを包含する状況であった。



3. 出土遺物

今回の調査では、墳丘上部から裾部付近にかけての二次堆積層や墳丘盛土層より弥生後期から古墳前期にかけての土器片が多く出土している。また、墳頂付近の表土層および上部堆積層からは古墳後期の須恵器片等も出土し、遺物コンテナ1箱分の遺物が得られている。ここでは古墳築造以前の遺物となる薬師山遺跡の土器について提示するものとしたい。

1～4の土器片はいずれも墳頂および墳裾付近の堆積層より出土したものである。

1は布留型壺の口縁部片である。内湾口縁端部の内面肥厚が顕著な定型化した布留型壺であり、内面頸部屈曲部より下位には明瞭なケズリ調整が認められる。布留式古相の帰属時期が考えられる。

2は小型丸底壺の小片である。口縁端部を欠くが、外面には全体的に細かく密なヨコミガキ調整を丁寧に施している。口縁部の内面には外面と同様に細かなヨコミガキ調整を加えた後に放射状の暗文が施されている。また、半球形を呈した体部の内面には板ナデの痕跡が認められる。

3はほぼ完形に復元された中空の小型器台である。上半受け部の内外面には細かいヨコミガキ調整を施すのに対し、下半の脚台部分では外面にタテ方向の板ナデの後にナナメハケ、内面にはヨコナデが見られた。また、受け部と脚台との接合部の下位には指頭圧痕が残る。

4は外反口縁の広口直口壺である。外面頸部付近には刺突文が部分的に施されている。内面頸部以下には指頭ナデと指頭圧痕が認められる。

これらの土器のそれぞれ帰属時期は1～3が概ね古墳前期の布留式古相に、4が弥生後期末から庄内式期の範疇に位置付けられる。

図3 調査区南壁土層図 (S=1/100)

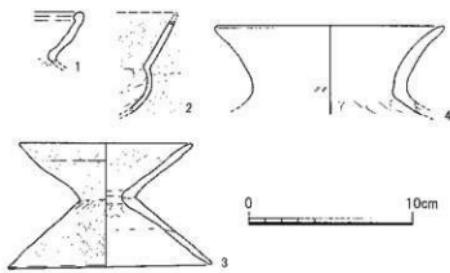


図4 出土遺物実測図 ($S \sim 1/3$)

III. まとめ

以上のように、調査では墳壠の一部についてのみの確認と下層の集落遺跡である薬師山遺跡の一端を窺い知ることができた。

なお、炭窯設置のための掘削にかかった部分について土層断面の観察をおこなったが表土直下で地山面となっており、調査で知り得た墳壠推定ラインよりも下位にある後世の改変後の丘陵斜面壁であったと考えられる。

3. 平等坊・岩室遺跡（第25次）－岩室町

I. はじめに

天理市の西部、盆地の中央に立地している平等坊・岩室遺跡は、南北500m、東西400mに達する大規模な遺跡で、大和の弥生時代拠点集落の一つとして知られている。この遺跡の発掘調査が頻繁に行われるようになったのは昭和50年代からで、水路改修や宅地開発によって進められた。当初、市街化区域は遺跡の中ほどあるヒライ池の北側であったが、現在はヒライ池を囲むように池の西・南側（国道25号線との間）へ拡大したため、遺跡の3分の1ほどが造成や住宅開発の影響を受けることになった。平等坊・岩室遺跡は、平成20年度までに30次もの発掘調査を行っているが、調査位置図（図2）で示すようにヒライ池の周辺に調査地点が集中している。その内、25・26・27・28・29次調査地点は、市街化区域が拡大してからの開発によるものである。本概報は、ヒライ池の南側で国道25号線との間に位置する耕作地（およそ20000m²）において商業施設の開発を目的とした計画が起きたため、その事前調査として平成15年度に実施した発掘調査である。この場所は、平等坊・岩室遺跡の中心である環濠集落の一部が所在し、集落を区画する環濠の跡、環濠から隔てた周辺に広がる遺構、弥生時代の頃に流れていた河川跡などの遺跡が予測され、開発業者に対して文化財行政への理解と調査費用の協力を得て、その記録保存のための発掘調査を指導したものである。そして、1区～12区調査地点（図1）は、環濠集落の範囲に関わるため影響が直接及ぶ建築物の基礎工を対象に調査区を設定したもので、一方の環濠集落からやや東方に隔てたF・G調査区は、環濠が出土する地点からおよそ100m東方に隔てた場所にあたるために、建築物の計画を考慮しながら遺跡の範囲確認を目的に調査区を設定した。発掘は、第25次調査とし平成17年1月11日から平成17年3月18日まで行った。

II. これまでの経過と状況

これまで30次に及ぶ調査から遺跡の様子が、およそ見えてくる。まず、平等坊・岩室遺跡には良好な微高地と自然流路を作り、こうした環境によって縄文時代晩期末や弥生時代前期から後期、さらには古墳時代まで集落が展開している。また、古墳時代後期になると岩室池古墳が出現し、奈良時代の寺院跡の存在も古瓦や遺構から指摘されている。莊園時代以降は条里制によって水田開発がなされ、中・近世の農村集落を示す遺構と条里水田が出現

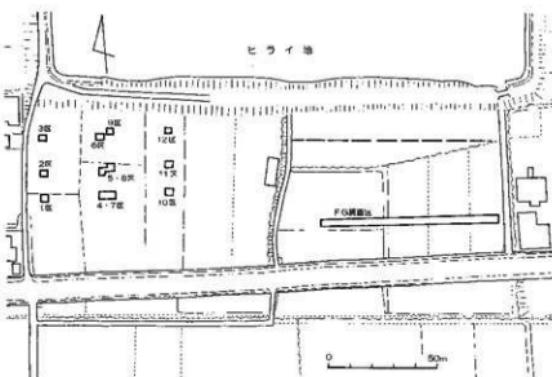


図1 第25次調査地点図

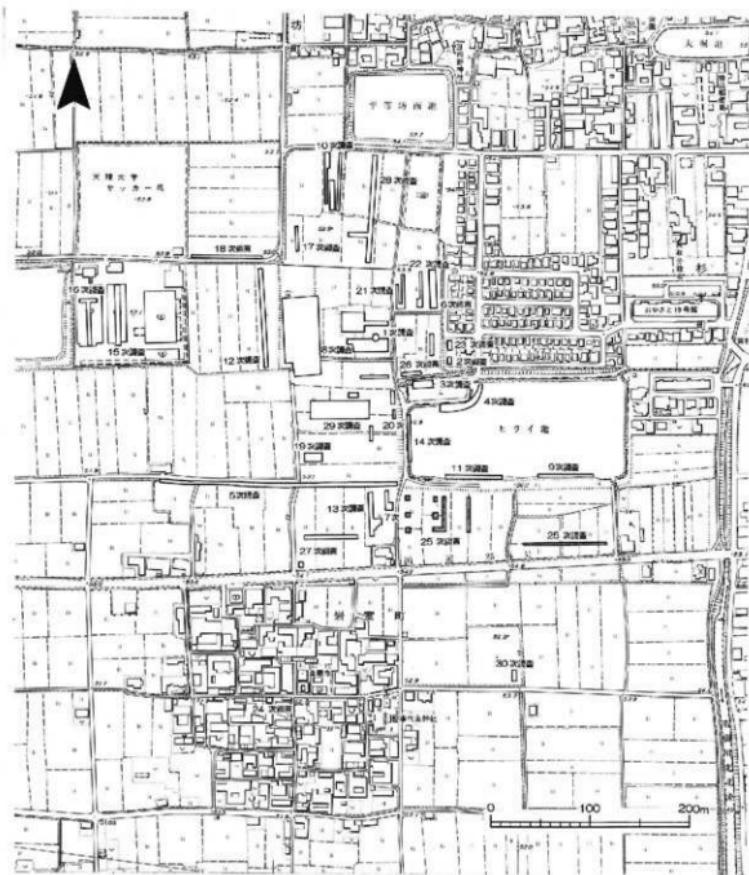


図2 平等坊・岩室遺跡調査地点図 (S 1/5000)

し、河川が流动していた古代的景観から現在のような一面の耕作地帯に変化している。

平等坊・岩室遺跡の主体である弥生時代は、遺物量も豊富で遺跡全体に遺構がある。遺跡の本体をなす環濠集落は、ヒライ池の西側（19・29次調査地点）を中心にして、第8・12次調査地点からは集落の北西側を区画した弥生時代前期から後期までの環濠が多数出土し、第2・4・23次調査及び第11次調査地点には、弥生時代前期から後期まで東側を区画する環濠がある。平等坊・岩室遺跡の西方及び南方は、第5次調査において弥生時代の自然河川が出土し、その対岸から遺構を伴い、本体の環濠集落とは別の集落が推測される。環濠集落の中心部にあたるヒライ池の西側では中心部でありながら自然流路や落ち込みが検出されるなど（5・29次調査地点）、立地する微高地に起伏を伴い、環濠の内部は住居だけといった状景ではない。そして、弥生時代前期に比べて中期の環濠は、さらに外側へ展開し環濠集落の範

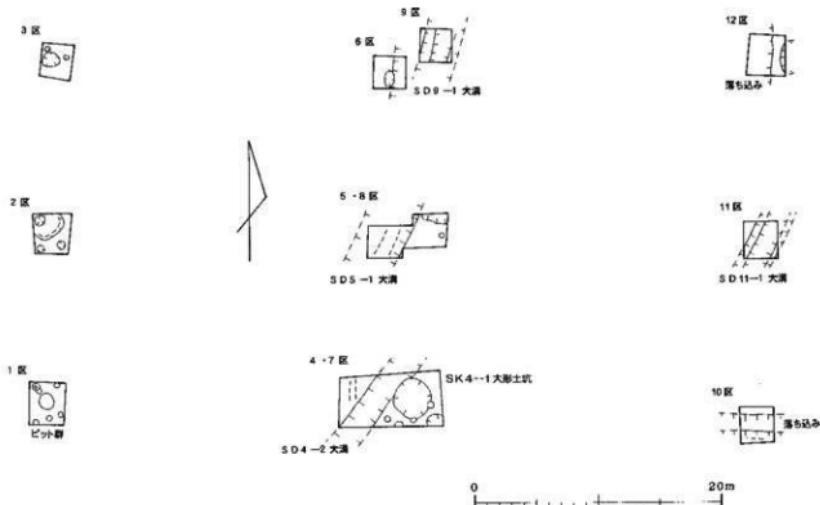


図3 第1区～第12区調査地点位置図 (S 1/400)

面が拡大するなど、集落は弥生時代前期から中期にかけては発達的な様相にある。そして、弥生時代後期になると方形区画の大溝が出現し、弥生時代前期から中期までとは集落の様相が変わっていく。

今回行った第25次調査地点(図3)は、そうした環濠集落の東側にあって、環濠の内部からその縁辺に位置し、1区から3区にかけては環濠集落に伴う良好な微高地と土坑や柱穴構造が出土している。4区から9区にかけては、弥生前期から中期にかけて3条の環濠を検出し、その内、4・7区では弥生時代中期のSD 4-2 大溝と中期後半のSK 4-1 大形土坑を検出、5・8区及び6・9区かけては前期末から中期前半のSD 5-1・SD 9-1 大溝が出土している。さらに環濠の外側にあたる10区では、弥生中期の深い落ち込み、同じく11区は弥生時代前・中期の溝、12区では古墳時代の落ち込みを検出している。

III. 1区～12区の調査概要

開発地の西半部に設定した調査区で、小規模トレンチを1区から12区まで設定している。同地点は、標高52.8m前後の耕作地が広がり、弥生時代の遺構はこうした地表面からおよそ50cm下位で検出している。なお、中世から現在に至るまで平等坊・岩室遺跡では条里水田の開発が行われ、これに伴い弥生時代の生活面であった地層は削平を受けている。遺構は、遺存する基盤層(黄褐色土)を日安に遠隔検出面として調査を実施したものである。また、第25次調査地点の北側に隣接する第11次調査地点は、平成4年度にヒライ池の南側の護岸工事に際して行なわれた調査であるが、集落をめぐる環濠を検出しているため、それを参考にしながら調査について概説する。

1、第1区

環濠の検出地点より内側に設定した一辺3mの調査区で、柱穴やPit、土坑が多数出土している。地表から約30cmほどで土器を多量に包含した黒色土が厚く遺存し、土層断面の観察から複数の遺構が重複し包含層を形成している。調査面積が狭いため遺構の性格を説明するのは難しいが、柱穴やPitが多数見られることから複数の住居跡が存在していたものと思われる。出土遺物は、下層の土坑から弥生時代前期の土器を伴うもの、柱穴やPitからは大和第II・III様式土器の破片が目立つ。また、黒色土の上位から弥生時代後期の土器片とともに緑色凝灰岩製の管玉1点が出土している。管玉は掘り下げ中に出土したもので遺構との関係は定かでない。(図31)

2、第2区

環濠の検出地点より内側に設定した一辺3mの調査区で、弥生時代前期の方形土坑と弥生時代中期の土坑が出土している。SK 2-1・3は弥生時代中期の土坑で住居跡に関係する遺構と思われる。しかし、1区のように多数の柱穴やPitなどの遺構は集中していない。調査区の中央から出土した一辺2m、深さ60cmほどの方形土坑は、遺物の出土量は少ないが弥生時代前期土器の破片を伴い、田原本町唐古・鍵遺跡から出土している木器貯蔵穴に類似すると思われる。内部から木製品などの遺物は出土していない。

3、第3区

環濠の検出地点より内側に設定した一辺3mの調査区で、中央から径1mほどの土坑を1基検出している。時期は、大和第III様式土器(図23-1~3)が出土している。この土坑を検出した基盤層下位には、灰色砂礫層や黄灰色砂が堆積し、第7次調査で検出した弥生時代前期の自然流跡跡に伴う堆積層の一部と思われる。この自然流跡跡は、弥生時代以前から弥生時代前期大和第I様式にかけての土器など遺物を大量に伴うもので、弥生時代前期後半には埋没する。埋没した流路上面には、弥生時代前中期の土坑やPitが存在する。

4、第5・8区

環濠上に設定した調査区で、隣接する5区、8区を一本にして東西8m、南北3mで調査を行った。遺構は、幅4m以上深さ1mほどのSD 5-1大溝(環濠跡)を検出している。図7は、第5区の様子を示したもので、地表から約50cm下位では弥生時代中期前半の

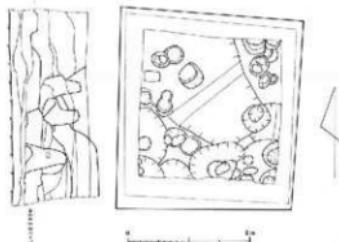


図4 第1区調査平面・断面図 (S1/80)

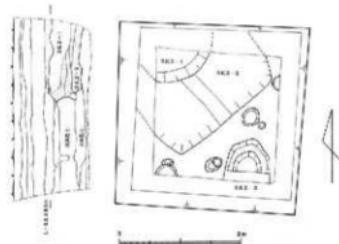


図5 第2区調査平面・断面図 (S1/80)

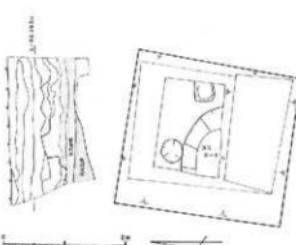


図6 第3区調査平面・断面図 (S1/80)

土器（大和第II-3様式）を伴うSD5-1大溝の黒色土を検出している。大溝の下部には粘土層と砂層が混じるSD5-1下層があり、弥生時代前期・中期土器（大和第II-1様式から大和第II-2・3様式上器）を伴う。また、SD5-1下層の直下には、弥生時代前期の砂礫層（大和第I-2様式）があり、幅4m以上、深さ1mほどの弥生時代前期の大溝で、砂礫の堆積によって埋没した後、前期末頃に新たにSD5-1大溝を掘削し弥生時代中期前半にかけて展開したものである。

5、第6区・第9区

環濠上に設定した調査区で、1辺3mの調査区をそれぞれ設定し、5・8区から出土したSD5-1大溝の延長にあるSD9-1大溝を検出している。6区では、SD9-1大溝の西岸を検出し、9区ではSD9-1大溝の堆積層とその落ち込みを検出している。大溝の中央から西岸かけて検出した遺構で大溝の東岸は調査区外となつたため、6・9区での大溝の規模は定かでない。大溝には、大和第II・III様式土器を伴う黒色土が堆積した上層と、大和第I・II様式土器を伴う砂混じりの粘土が堆積する下層に大別でき、5・8区に比べて遺物量は少ないが、出土遺物から弥生時代前期末から中期前半にかけて展開した大溝であることが分かる。なお、大溝が落ち込む肩を検出した6区では、大溝の基盤層から縄文時代晚期土器の破片が出土している。

6、第5・8区

SD5-1大溝出土土器について（図10～16）

SD5-1大溝から弥生時代前期末・中期前半の土器がまとめて出土したので報告する。

- SD5-1 黒色土下位一括土器（図10～13）

SD5-1大溝の上層に堆積していた包含層の下位から大和第II-3様式の土器資料がまとめて出土している。

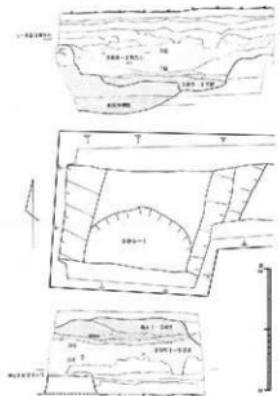


図7 第5区調査平面・断面図 (S1/80)

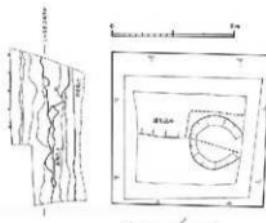


図8 第6区調査平面・断面図 (S1/80)

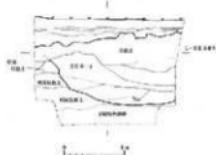
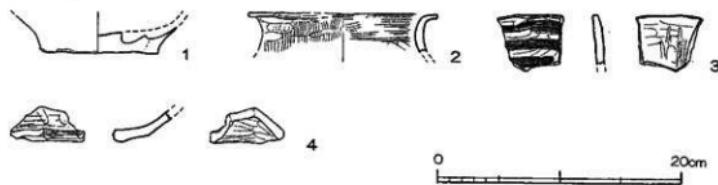


図9 第9区調査断面図 (S1/80)

SD5-1黑色土上位



SD5-1黑色土下位（一括出土）

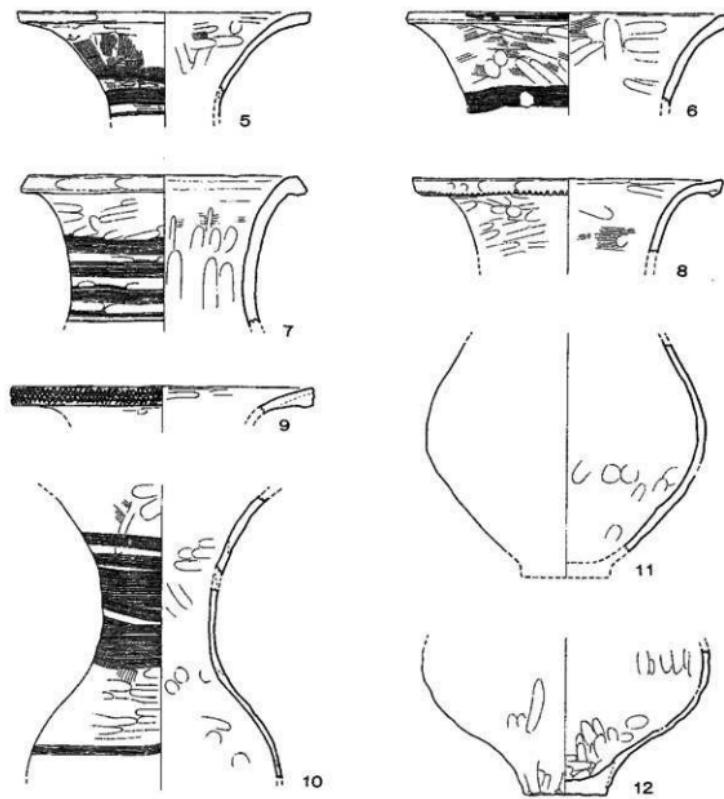


図10 第5区・SD5-1大溝出土土器 (S1/4)



图II 第5区·SD5-1 大溝出土土器 (S1/4)

SD5-1 黑色土下位（一括出土）

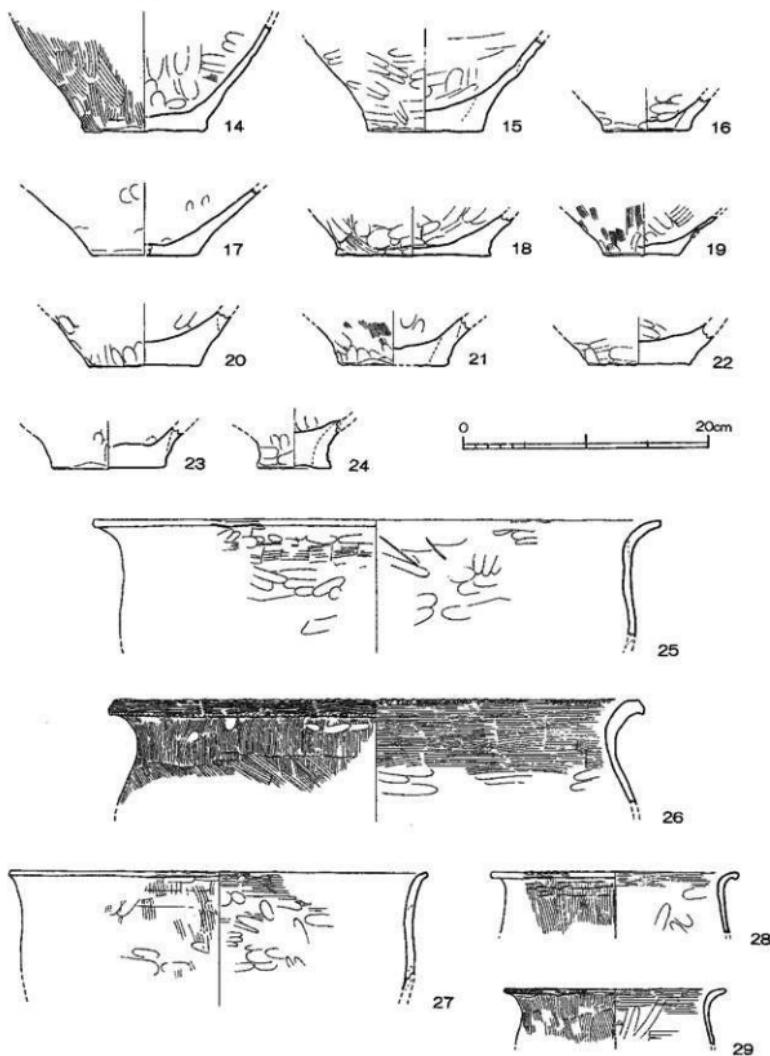


図12 第5区・SD5-1大清水出土土器 (S1/4)

SD5—1黑色土下位（一括出土）

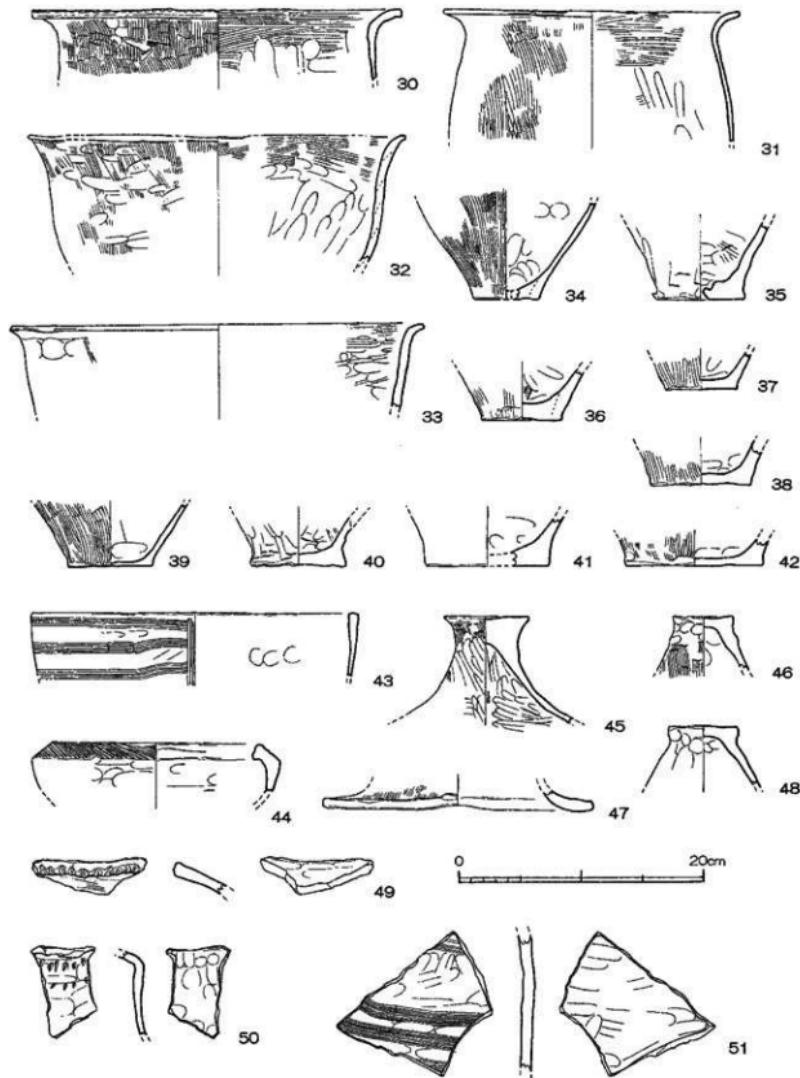
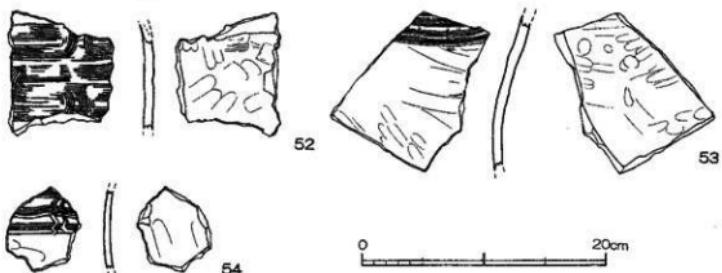


図13 第5区・SD5—1大溝出七十器（S1/4）

SD5-1 黑色土下位（一括出土）



SD5-1 下部

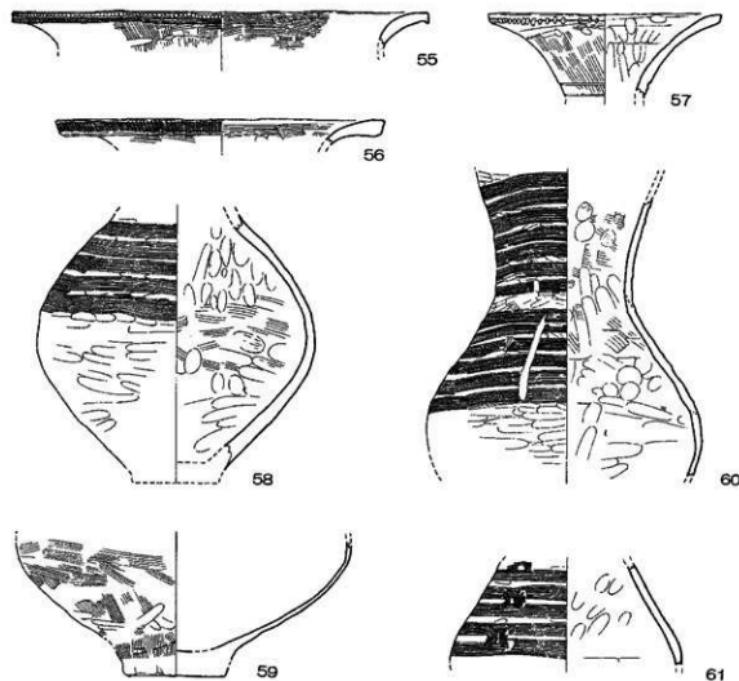


図14 第5区・SD5-1 大溝出土土器 (S1/4)

SD5-1下層

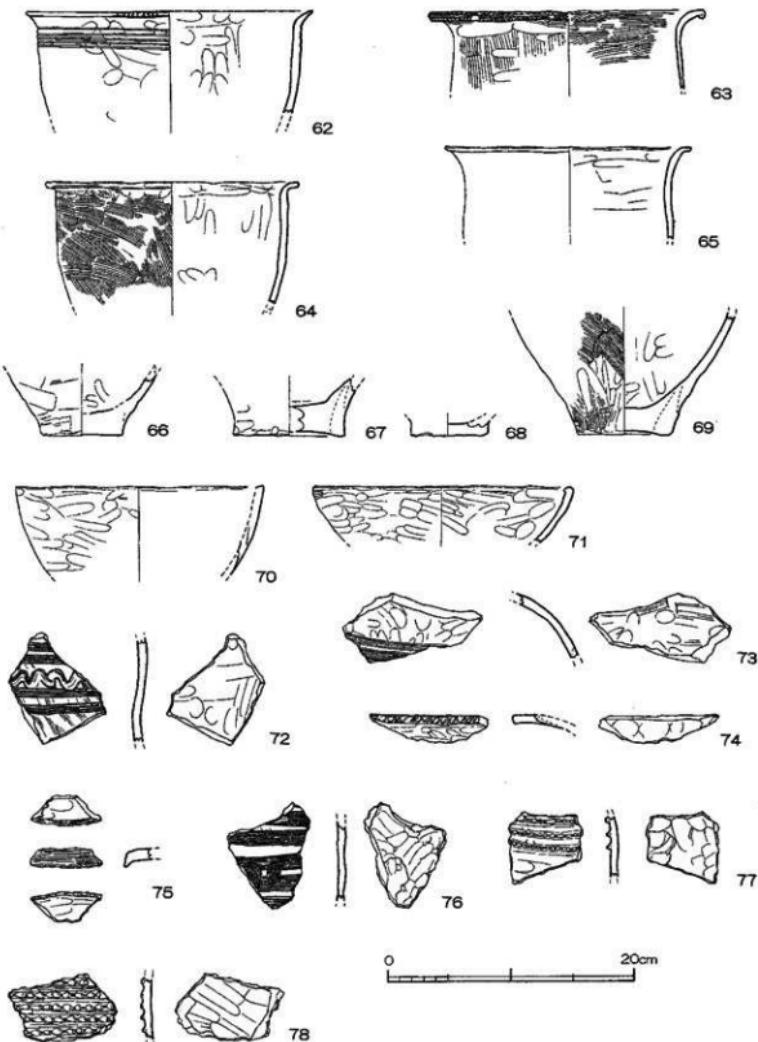


图15 第5区・SD5-1大溝出土土器 (S1/4)

SD5-1下層



0 20cm

前期砂礫層

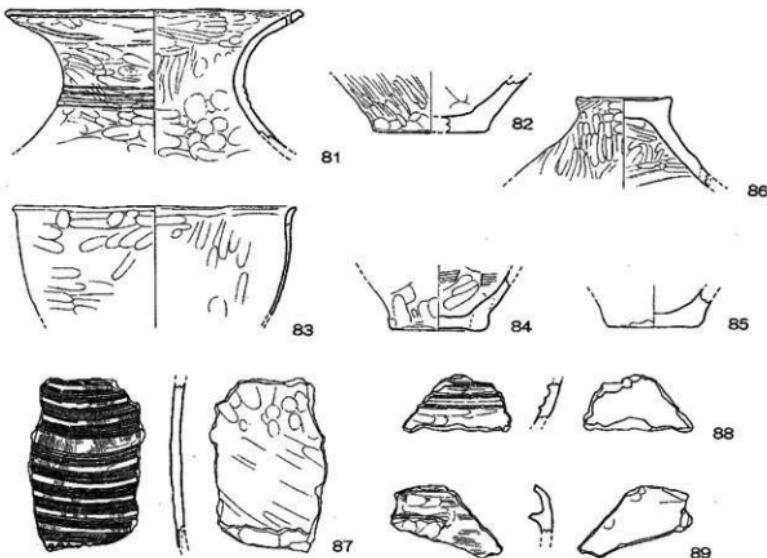


図16 第5区・SD5-1大溝出土土器 (S1/4)

器種は、壺、甕が主で壺蓋、鉢が含まれ、高环は含まれていない。壺は、口径25~30cmの広口長頸壺(図10-5~10)と、胴部の器高が70cm、底部径15cmの大形壺(図11-13)が出上している。均一な形態で胴部から頸部にかけて明瞭なくびれをもつ大和第Ⅲ様式の壺に比べて、大和第Ⅱ様式の広口長頸壺は胴部から口頸部にかけて明確なくびれがなく湾曲した形状で口縁部まで立ち上がる。口縁端部は、外面に粘土を貼り付け下方に肥厚させたもの(図10-7~9)、端面に刻みを施したもの(図10-8)、斜線文の後に捺描沈線文2条を施したもの(図10-9)など形態も個体差を示す。施文は、頸部から胴部にかけて柳描直線文を施すものが多く、柳描直線文に擬似流水文で仕上げたもの(図14-52・54)がある。器壁外面には、密なミガキを施す。大形壺は、胴部上位から口頸部にかけて柳描直線文を施した広口長頸壺と推測され、完形品であれば高さ1mを越える大形の広口長頸壺である。壺の底部(図12-14~21)は、底部径10cmほどのものが目立ち、底部底面の成形に粘土を充填させたもの(図12-16・21・24)、底部から胴部への粘土接合に外傾接合の痕跡を残すもの(図10-12・図12-15・21・23)がある。

弥生時代前期に比べて底部の厚みは薄く感じられるが、突出した底部（図10-12・図12-24）など、技法や形態的に前期の遠賀川系土器の壺と類似している。壺は、口径45cm前後の大形（図12-25・26）、口径20~30cmの中形（図12-27、図13-30~33）、口径20cm未満の小形（図12-28・29）がある。壺の種類は、器壁が薄く外面に縦ハケを施し、湾曲した口縁部とその内面に横ハケ、口縁端部に刻み目を施したいわゆる大和形壺（図12-26・28・29、図13-30・31）が一般的で、他に大形の壺で外面にハケ調整ではなく、粘土の積み上げ成形も外傾接合の壺（図12-25）、口縁部と胴部の境目が不明瞭な倒錠形の壺で、胴部外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケを施すが雖然とした調整で器壁もやや厚く、大和形壺とは異なる壺（図12-27、図13-32）がある。また、弥生時代前期の混入と思われるが、口縁部が短く外反した遠賀川系土器の壺（図13-32）も含まれている。他に、図12-26の壺は、大和形壺に類するが口縁端部に面を有し下両端に刻み目を入れるなど、胴部外面のハケ調整も斜めハケを施し近畿内陆部の滋賀県から三重県にかけての地域から搬入した上器と思われる。壺の底部は、底面を薄く成形し外面に縦ハケを残す大和形壺（図13-34・36~39・42）、外面の調整が不鮮明で大和形壺とは異なる上器の底部（図13-35・40・41）、壺の蓋（図13-45~48）などが出土している。鉢は、弥生時代前期と同様に器種構成では数の少ない十器で、口径25cm前後のやや大振りで器面には櫛描直線文と縦割りに直線文を施した直口口縁の鉢（図13-43）が出上している。また、三河地域からの搬入品で口縁部に貝殻縫痕を施した口径18cmほどのいわゆる岩鍋式土器にあたる厚口鉢1点が出土している。

・SD 5-1 下層出土土器（図15・16）

SD 5-1 大溝下層に堆積していた粘土層や砂礫層から出土した土器で、出土状態は一括性の資料ではない。特徴は、櫛描文と篦描沈線文を施した土器が含まれ、器種は壺、甕が目立ち高坏は出土していない。壺は、胴部から口頸部にかけて湾曲して立ち上がる広口長頸壺（図14-56~61）があり、口縁端部には刻み目と頸部に篦描沈線文を施したもの（図14-57、図15-75）、肥厚した口縁端部に直線文と竪による刻み目を施したもの（図14-56）、胴部に直線文から擬似流水文を施したもの（図14-61・図15-76）など、器面は施文の後に密なミガキを施す。甕は、口径35cmほどの大形（図14-55）、口径20cmほどの中形の甕がある。形態は、縦ハケを基調に仕上げた大和形甕（図14-55、図15-63）、短く口縁部を屈曲させた遠賀川系土器の甕（図15-62・64）、縦文晚期の突唇文土器から形態を残すいわゆる紀伊形甕（図15-65）が出土している。大和形甕は、口縁端部の上下に刻み目を施し口縁の開きもやや強く外反させたもので、出現期の古い大和形甕に見られる特徴である。遠賀川系土器の甕には口縁部の下に5条の篦描沈線文を施すもの（図15-62）、無文で胴部外面に斜めハケを施すもの（図15-64）がある。資料としては、櫛描文と篦描沈線文が混在し、遠賀川系土器の甕と大和形甕も伴うなど大和第II-2様式の資料である。甕の底部は、内厚で底面に粘土を充填したものがあり、粘土の接合痕も外傾接合の土器が多い（図15-66・67・69）、いずれも遠賀川系土器の甕底部と思われる。壺、甕に比べて鉢や高坏は少ないので、無文で密なミガキに仕上げた直口口縁の土器（図15-70・71）がある。

・弥生時代前期の砂礫層出土土器（図16）

SD 5-1 大溝の直下には、砂礫が堆積する流路があり弥生時代前期の土器が出土している。壺は、口径24cm、頸胴部には削り出し突帯に2条の沈線文を施した大和第I-2様式の広口壺（図15-81）で、前期後半に普及する刻み目突唇文を胴部外面に施した壺（図16-88）の破片、内外面に密なミガキで仕上げた蓋形土器（図16-86）、無文で口縁端部をわずかに外反させた鉢（図16-83）、口縁部の下に耳状の取手をつけた甕（図15-89）などである。なお、大和第II様式の櫛描文土器（図16-87）1点が図面

には含まれているが混入品である。また、SD 5-1 下層から出土している胸部に貼付突帯文を施し、突帯文に刻み目を付加した壺の胸部破片資料（図15-77・78）は、弥生時代前期の混入品と思われる。

7、第4・7区

環濠上に設定した調査区で、4区と7区を一本に発掘を行った。

その結果、調査区には

黄灰色土を伴う良好な基盤層があり、それをベースに溝幅3m、検出した深さ1.2m、南東から北東にのびるSD 4-2 大溝（環濠跡）を一条と、径3m、検出した深さ1.5mのSK 4-1 大形土坑を検出、他にPit遺構がある。SD 4-2 大溝は、遺構を検出した南半分が深さ0.5mで浅くなり、大溝の渡りとして土橋状の遺構が伴っている。この大溝の時期は、大溝下層（黒色粘土層）から大和第II-3様式の土器が出土し、出土土器の様子から弥生時代中期にかけて存在した環濠である。遺構の切り合い関係では、大溝の一部が大和第IV様式のSK 4-1 大形土坑に切られており、四線文土器が活発になる大和第IV様式以前に埋没している。SK 4-2 大溝上層（黒色土層）から出土しているタタキ痕をもつ甕は、大和第IV様式土器（図21-3・6）に求められることから、大溝が埋没した後、大形土坑が出現しそれに伴って存在した新たな遺構が重複していたため調査中に混入したものと推測する。この大溝より環濠の内側に区画されている5区のSD 5-1 大溝が大和第II-2様式から大和第II-3様式にかけて存在することから、弥生時代中期前半には、SD 5-1 大溝が内環濠、SD 4-2 大溝が外環濠として2条の大溝が並存したことになる。一方、大溝を切っているSK 4-1 大形土坑は、遺構の下層から井戸祭祀に用いたと思われる土器（図19）3点が出土し、土坑の規模から推測して第13次調査において検出している大形土坑と等しく井戸枠のない素掘り井戸と思われる。時期は、大和第IV様式土器が出土しておりSD 4-2 大溝やSD 5-1 大溝が埋没した弥生時代中期後半に掘削され、その後大和第IV様式には井戸の機能が失われ埋没したと考える。この他に同調査区には包含層から弥生時代後期の土器が出土している。4・7区調査地点は、当初は環濠を中心とした地点でSD 4-2 大溝には土橋があり、環濠への入り口がこの付近にあって、SD 4-2 大溝下層からまとまって出土した大和第II-3様式の土器は、土橋から廃棄された破片と考える。大溝の埋没後は大形土坑など居住地として展開するため、環濠集落の領域がさらに外側へ拡大している。

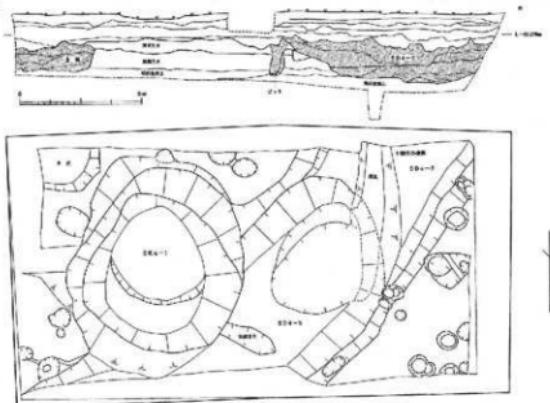
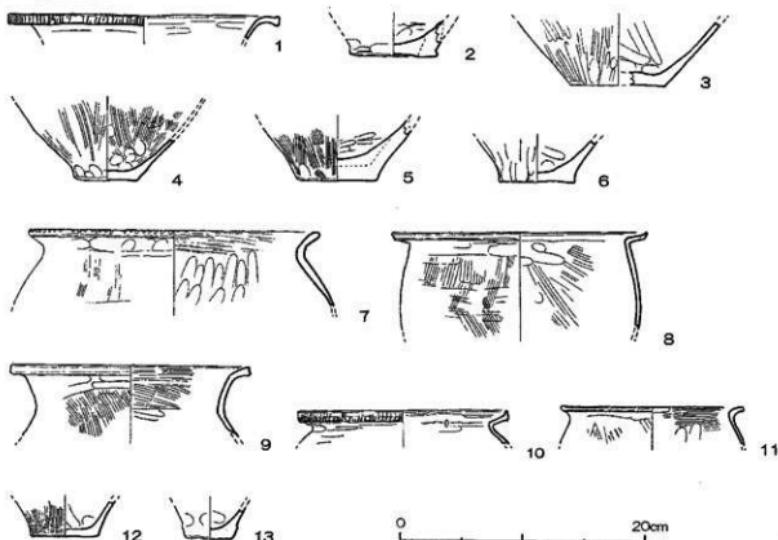


図17 第4・7区調査平面・断面図（S1/80）

SK4-1上層(黑色土)



SK4-1中層(黑色粘土)

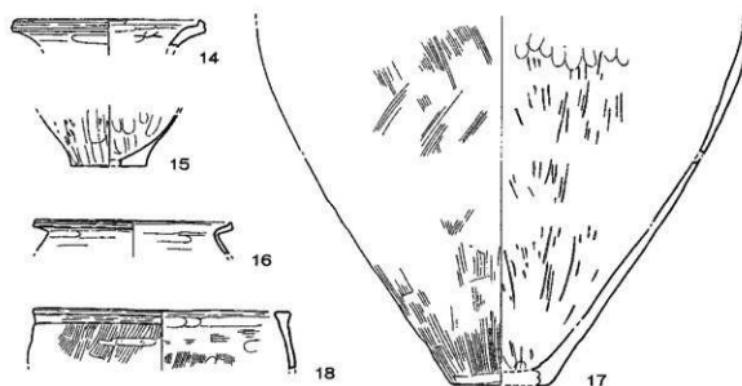
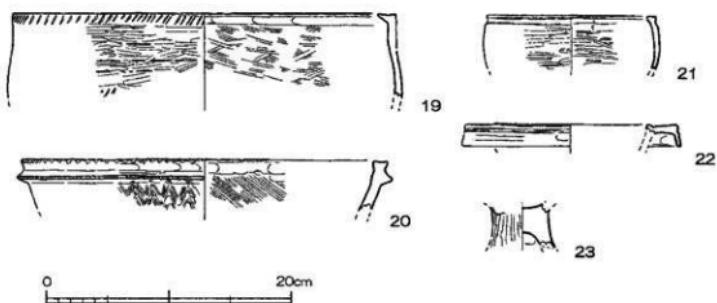


図18 第4・7区・SK4-1大形土坑出土土器 (S1/4)

SK4-1中層(黑色粘土)



SK4-1下層(黑色粘土)

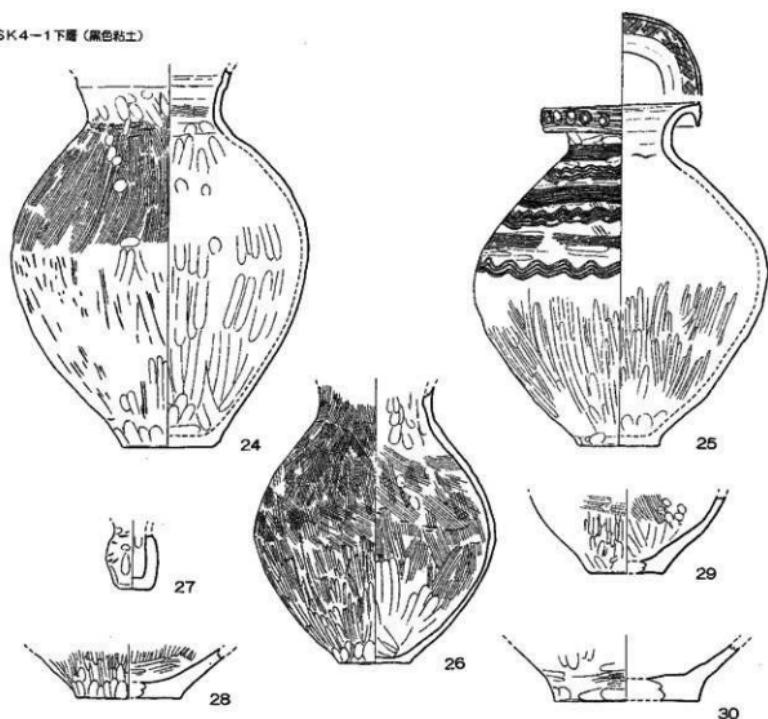
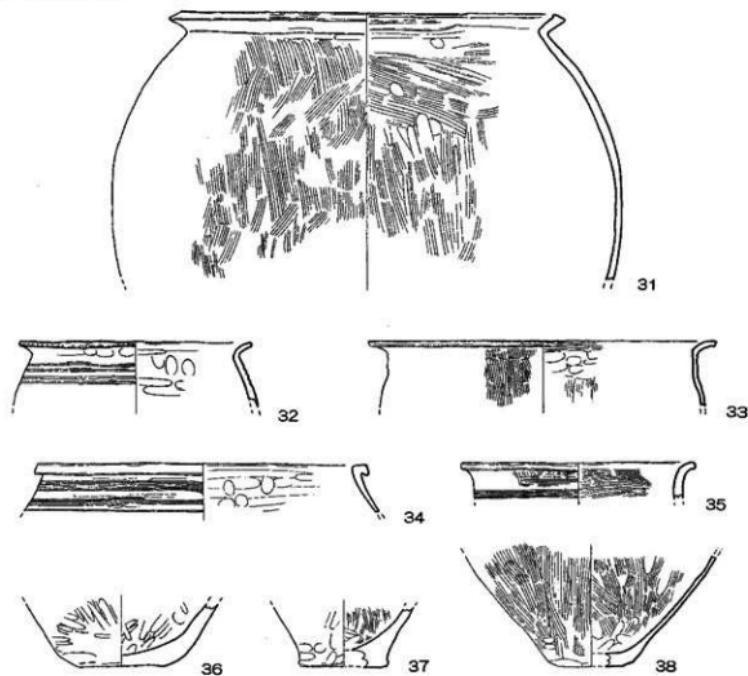


图19 第4・7区・SK4-1大形土坑出土器 (S1/4)

SK4—1下層(黑色粘土)



SK4—1上層

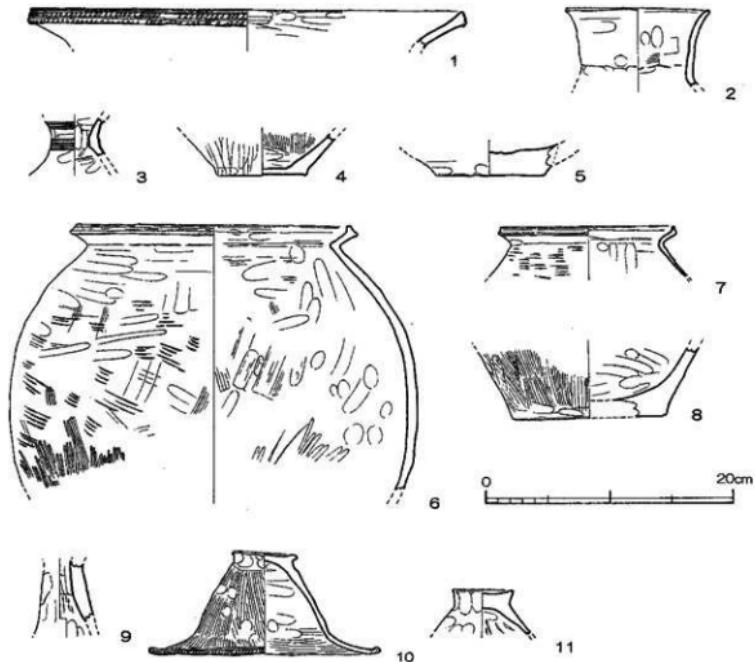


SK4—1(北壁)



图20 第4·7区·SK4—1大形土坑出土土器 (S1/4)

SD4—2上層(黑色土)



SD4—2下層(黑色粘土)

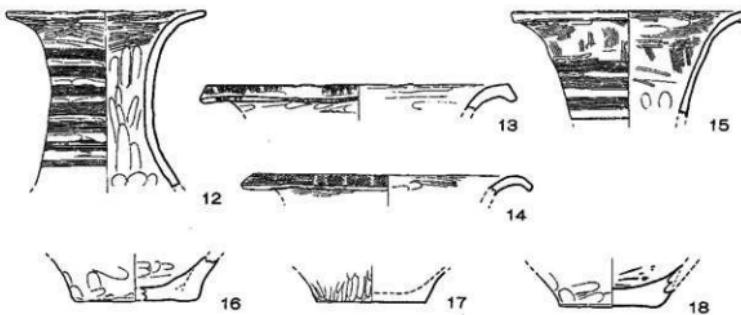


图21 第4・7区・SD4-2大溝出土土器(S1/4)

SD4-2下層(黑色粘土)

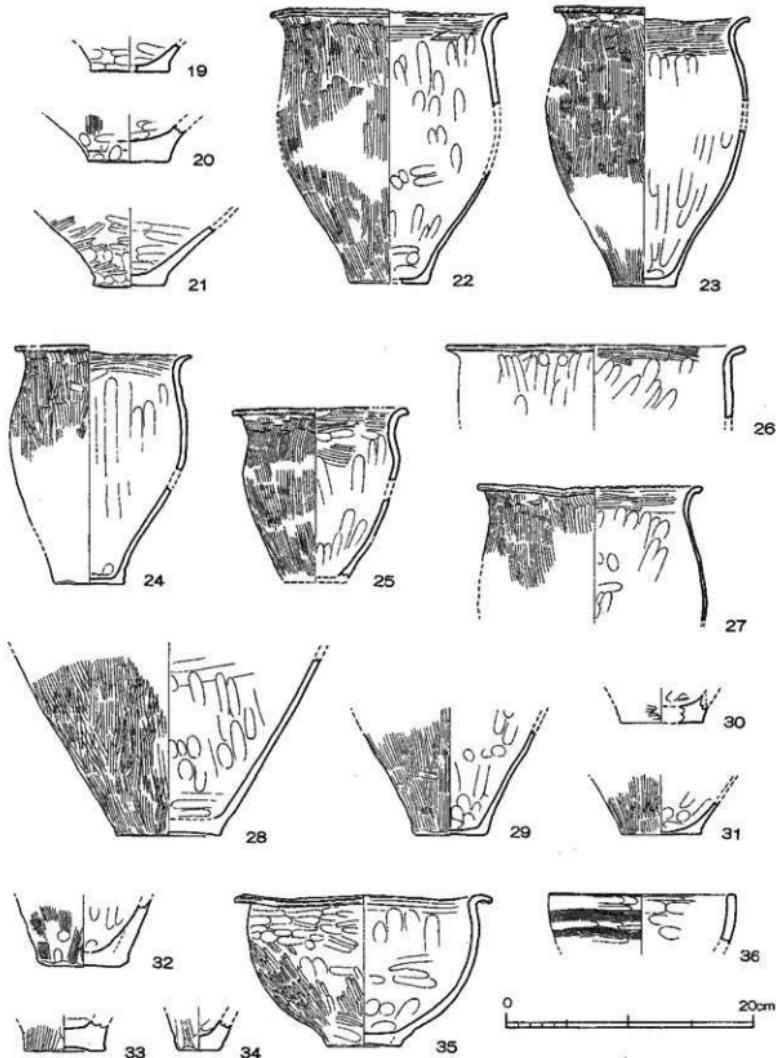
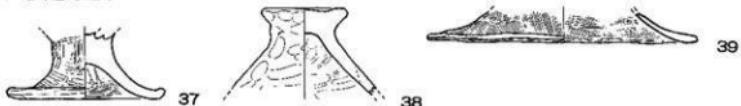


図22 第4・7区・SD4-2大溝出土土器(S1/4)

SD4-2 下層（黒色粘土）



37

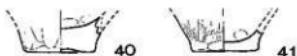


38



39

SD4-2 層下層



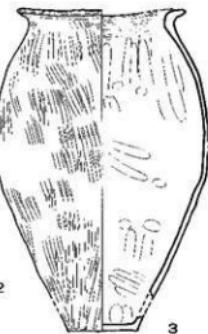
40



41

0 20cm

3区出土



2

3



図23 第4・7区・SD4-2 大溝出土土器 (S1/4)

8、第4・7区SK4-1 大形土坑出土土器

• SK4-1 大形土坑上層、中層

SK4-1 大形土坑の上層（黒色土）及び中層（黒色粘土）から、弥生時代中期後半の土器片が出土している。その内、壺、甕、鉢、高环など形態の分かるものについて図化した。壺では、口縁端部の下ドがやや肥厚し、端面に刻み目のある人和第Ⅲ様式の広口長頸壺（図18-1）、及び壺の底部（図18-2～6、15・17）。甕では、口縁部内面に横ハケを施し口縁部端面に刻み目を施した人和第Ⅲ様式のいわゆる大利形甕の類似した甕（図18-7・11）、口縁部に横ナデを施し口縁端部を上方に跳ね上げたいわゆるくの字状口縁の甕（図18-8・10・16）。鉢では、口縁部を横ナデで成形し、胴部外面をハケ仕上げした無文の鉢（図18-18）、同じく外面にミガキを施した無文の鉢（図19-19）、口縁部とその直下に一条の刻み目突蒂文、櫛描波状文を施した大和第Ⅲ様式の直口口縁の鉢（図19-20）、小振りだが口径13cmほどで口縁直下に一条の凹線文を施した小形の鉢（図19-21）、いわゆる水平線形口縁の高环（図19-22）中実で外面に縦ミガキをほどこした大和第Ⅱ様式の高环脚部（図19-23）があり、時期の異なる土器が混じって出土している。

• SK4-1 大形土坑下層

SK4-1 大形土坑の下層（黒色粘土）から出土した土器は、口縁部を欠いているが、胴部外面を縱ハケ、胴部下半をケズリ仕上げする無文の広口壺（図19-24）、やや小振りだが胴部外面をハケ、胴部下半を縦ミガキ仕上げする無文の広口壺（図19-26）、胴部上半に櫛描直線文と波状文を交互に施文、胴部下半には縦ミガキ仕上げで、短く湾曲した口縁部と幅広い端面には3条の凹線文と円形浮文を施した広口壺（図19-25）など3点の土器が一括で出土し、完形品である。甕は、口径32cmの大形で、横ナデを口縁部に施し口縁端部を跳ね上げたくの字口縁の甕（図20-31）があり、土器の特徴から大和第Ⅳ様式である。その内、胴部上半に竪描沈線文を施した甕や外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケを施した

大和形甕、胸部外面に櫛描文を施した甕（図20-32・33・35）は、時期が異なるため混入品と思われる。

9、第4・7区SD4-2大溝出土上器

SD4-2大溝から出土した土器は、概ね大溝上層の黒色土と大溝下層の黑色粘土に分けて図化した。SD5-1大溝と同様に大和第II-3様式の土器が主体だが、上層の土器表面には造構の時期とは異なるが弥生時代後期も含む。

・SD4-2大溝上層（黒色土）

弥生時代後期の土器は、短頸甕（図21-2）、高环脚部（図21-9）があり、同時期の造構が重複していたため混入したものと思われる。また、弥生時代中期後半の大和第IV様式の土器は、口縁部がくの字状の口縁で端部を跳上成形し、胸部にはタタキ痕のある甕（図21-6・7）や沈線文を施した高环脚部（図21-3）がある。SK4-1大形土坑と時期的に並行して存在した造構が大溝に重複していたため、混入品として出土したものと思われる。その他、口縁部端面に2条の沈線文と刻み目列点文を施した大和第II様式の広口長頸甕（図21-1）、同じく人和第II様式の甕の蓋（図21-10）がある。図21-4の甕の底部は、外面に綫ミガキを残し、床面も薄手に仕上げていてから大和第III様式の上器である。同じく図21-8の大形甕の底部は、外面に綫ハケを伴い大和第II-3様式又は大和第III様式の大和形甕の底部と思われる。

・SD4-2大溝下層（黑色粘土）

弥生時代中期前半の大和第II-3様式の土器が主体で、わずかに大和第III様式の土器が含まれる。甕と甕が口立ち、鉢と高环が少なく器種的には人和第II様式の様相である。図21-17の甕の底部は、外面に綫ミガキを施し大和第III様式の土器である。下層の黑色粘土が大和第II様式を主体にしながらも大和第III様式まで存在したことは確かである。

並では、胸部から口頭部にかけて湾曲した形態で口縁端部を円頭状に仕上げた広口長頸甕（図21-12）、口縁端部を下方に垂下させ端面に波状文を施した広口長頸甕（図21-13・14）、口縁端部をわずかに肥厚させ端面を成形した広口長頸甕（図21-15）など大和第II-3様式の土器があるが、SD5-1大溝出土の広口長頸甕に比べて、口縁端部が薄く垂下した口縁や波状文を伴うなど、人和第II-3様式でも大和第III様式に近い特徴である。甕は、外面を綫ハケ、湾曲した口縁部の内面に横ハケを施し口縁端部の上端に刻み目を施した典型的な大和第II-3様式の大和形甕（図22-22・24・25・27）、大和形甕だが胸部の膨らみが大きく刻み目を口縁部端面に直接施した甕（図22-23）、外面にはハケ調整がなく屈曲した口縁部の甕（図22-26）があり、甕の底部も床面を薄く作り外面に綫ハケがある大和形甕（図22-28・29・31）、大和形甕とは異なる器種の甕の底部（図22-30・32・33・34）がある。甕の蓋は、大和形甕のハケ手法で成形したもの（図23-39）、器壁が厚く外面にミガキ調整を施したもの（図23-38）がある。大和形甕が主体であるが手法の異なる甕や蓋を伴っている。鉢は、口縁部を強く屈曲させ、外面にミガキを施した広口の鉢（図22-35）と、口縁部が直上に立ち上がり櫛描直線文を施した直口口縁の鉢（図22-36）がある。図23-37の高环は高さ4cmの短い脚部で、外面にはミガキ、脚部基の内面には横ハケを施した中実の高环で、円盤充填技法は見られない。

10、第10区

環濠の検出地点より外側に設定した1辺3mの調査区で、東西方向に伸びる深い落ち込みがあり、その北岸を検出している。土層断面の観察から段掘りの形跡があり深さ1.5mの大溝だと思われる。調査区が狭いため溝幅など規模は定かでないが、再掘削前の落ち込み下層と再掘削後の落ち込みがあり、落ち込み下層に堆積する土層には粘土層や植物痕が堆積し、周辺には樹木などの繁殖も推測される。大溝の時期は、再掘削前の落ち込み下層から弥生時代中期後半（大和第III-3・4様式）の土器が出土し、石包丁や木質遺物も出土したことから、弥生時代中期後半にかけてこの付近には居住地が展開していたようだ。

11、第11区

環濠の検出地点より外側に設定した1辺3mの調査区で、北東から南西方向に伸びるSD11-1大溝を検出している。大溝は、規模が幅2m、深さ1mで、水の流れによって堆積した砂礫によって埋没している。時期は、弥生時代前期の土器が目立ち、わずかに大和第II様式の土器が含まれる下層と弥生時代中期の土器が目立つ上層があり、弥生時代中期に展開した大溝である。

12、第12区

環濠の検出地点より外側に設定した1辺3mの調査区で、深さ50cmほどの落ち込み1と、その東岸を検出した。落ち込み1の内部には暗灰色粘土が堆積し、弥生時代中期の土器片が多く含まれているが古墳時代の須恵器を伴うため、時期は古墳時代後期頃の落ち込みである。また、調査区の東端には浅い落ち込み2があるが遺構の性格は定かでない。

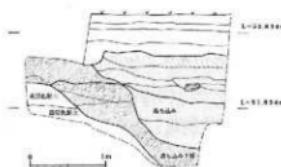


図24 第10区断面図

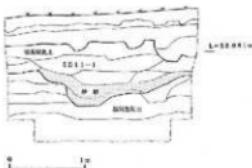


図25 第11区調査断面図

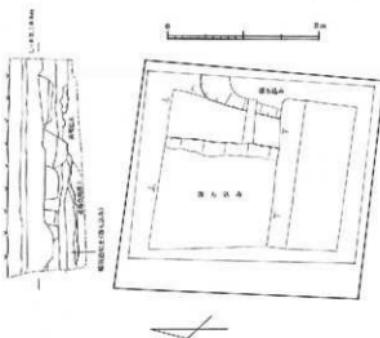


図26 第12区調査平面・断面図

IV. F・G調査区の概要

開発地の東半部に設定した調査区で、標高53.1mの耕作地を伴い1区～12区調査地点よりも地表レベルが高くなっている。この調査区は、環濠を検出した1～12区調査地点から東方70mにあり集落本体から離れた地点にあるため、当初は集落の外側を流れる河川跡や自然地形的な遺構が出土するものと考え、幅4m、全長90mで調査区を東西方向に設定したものである。しかし、新たに集落跡を検出することになった。ここでは、F・G調査区を西部、中部、東部に区分し遺構の状況を概説する。

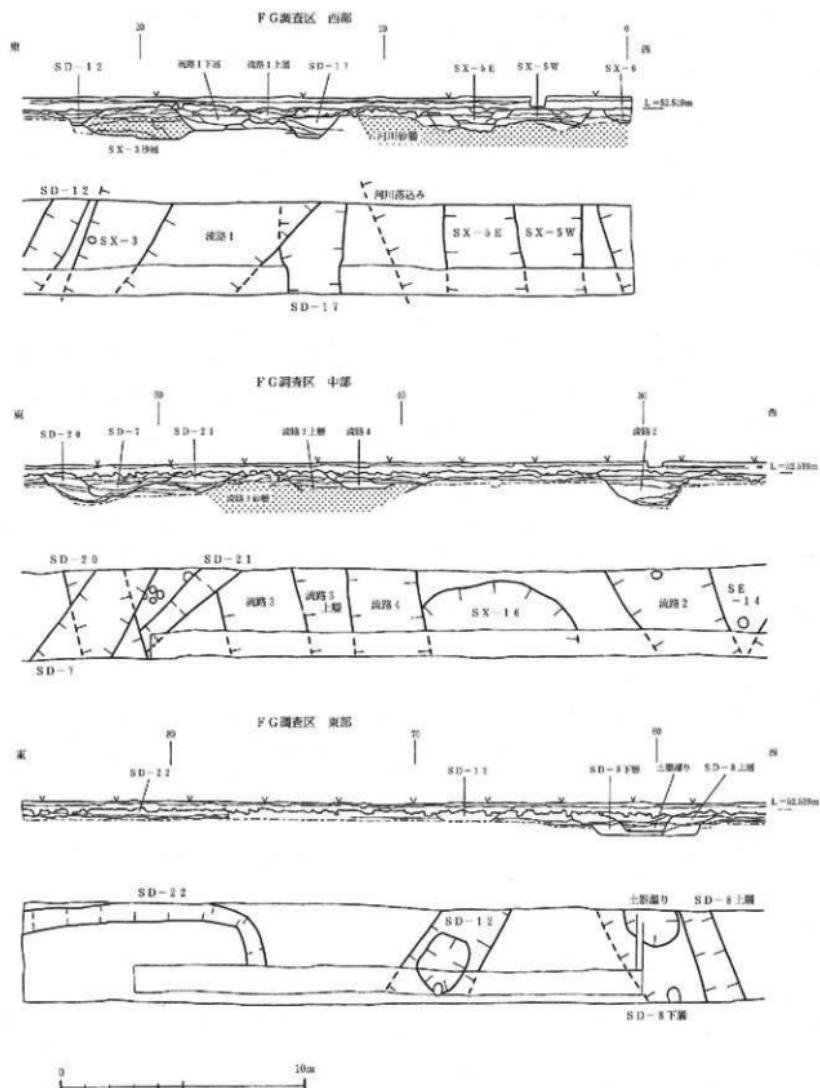


図27 FG調査区平面・断面図 (S1/200)

1、西 部

F・G調査区の西端0mから25mまでの地点をF・G調査区の「西部」としている。標高52.6mで黄褐色土基盤層の上面を遺構検出面としたが、弥生時代の生活面である黒褐色土包含層は耕作土直下の床土層によって削半を受けている。

河川跡：西部では、0～10m地点のあたりまで河川跡に伴うおびただしい砂礫層が地層の下位に所在し、砂礫層が落ち込む東岸を10m地点で検出している。河川の規模は、西岸が調査区の外側になるため、幅20～30m程度と推測する。河川の深さは、検出面より2m以上にも達し、深い落ち込みを伴っている。F・G調査区の範囲内では河川に伴う出土遺物がなく、弥生時代以前の砂礫層が堆積しているものと考えている。また、この河川は第4・6・17・18・28次調査（図2参照）において検出した河川跡につながり、その流域の上流を検出したものと思われる。これは、条里水田が形成された中世より以前に存在した旧布留川水系の一部で、平等坊・岩室遺跡では弥生時代環濠集落に接して北西方向から南北方向に蛇行しながら流れていったものである。F・G調査区では、この砂礫層の上面から流路に伴う落ち込み（SX-5E、SX-5W、SX-6）を検出し、遺物は少ないがSX-5Eから弥生時代中期の上器片が出土している。

弥生時代中期末・後期初頭の遺構：西部20m地点では、弥生時代後期初頭から古墳時代初頭（庄内期）にかけて展開した複数の大溝（流路1上層、流路1下層、SD-12、SD-17）を検出している。時期的説明すると、幅3m、深さ1.2mのSD-17大溝が河川跡の東岸からやや隔てた位置で検出した南北方向に流れる大溝である。SD-17大溝の下層には大和第V様式土器（図28）含まれ、砂礫の堆積が際立つ。一方、同上層には大和第VI様式の上器（図28）が多量に出土し、SD-17大溝が弥生時代中期末・後期初頭に掘削され後期半ばで埋没している。

弥生時代後期～古墳時代初頭：SD-17大溝を切って流路1がその東側から検出している。調査時は、砂礫が目立ったため自然流路と思っていたが、大溝で名称は流路1と呼んでいる。規模は、幅3m、深さ1mで砂礫層の堆積が日立つ流路1下層と、幅1.5m、深さ0.6mの流路1上層に区分けし、北東・南西方向に流れている。流路1下層から弥生時代後期末の上器が、流路1上層から古墳時代初頭の庄内期の土器が出土し、SD-17の埋没後、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて存在した大溝である。

その他：流路1の下部からSD-17より以前に堆積したSX-3砂層と、流路1下層に並行して幅1m、深さ0.6mのSD-12溝を検出している。いずれも上器類が含まれていないため具体的な時期の判断ができないが、SX-3砂層は弥生時代中期以前の堆積層、SD-12は弥生時代後期の溝と思われる。

2、中 部

25m地点から55m地点までを調査区の「中部」としている。遺構検出面は標高52.8m前後で西部よりも検出面が全般的にやや高くなっている。黄茶褐色土基盤層を遺構検出面にしているが、西部と同様に弥生時代の生活面にあたる黒色土包含層は耕作土の床上によって削半を受け認められない。

弥生時代中期以前の遺構：30m地点で検出した流路2（規模は、幅4m、深さ1.5m）、40m～50m地点で検出した流路3砂層（幅10m、深さ2m以上）と、流路4（幅3m、深さ0.8m）は流路3の上層遺構と思われる。その他、55m地点で検出したSD-20（幅2.5m、深さ1.2m）があり、いずれも土器など遺物を伴っていない。また、遺構の方向が南北方向にあるのが共通した特徴である。F・G調査区では、弥生時代中期末・後期初頭から弥生時代後期、古墳時代初頭の遺物があり、同時期の集落遺跡について存在が推測される。弥生時代中期以前は、遺物が極端に少なくなる。また、SX-16から混入だが

縄文時代晚期（長原式）突帯文土器の破片が出土している。

弥生時代中期末・後期初頭の遺構：50m地点で検出したSD-21溝（幅1m、深さ0.8mの溝）と、30m～40m地点で検出したSX-16落ち込み遺構がある。いずれも大和第V様式土器が出土している。

弥生時代後期：25m地点で検出したSE-14井戸遺構から長頸壺など弥生時代後期土器が出土している。

古墳時代初頭：50m地点で検出したSD-7（幅3m、深さ1m）大溝で、SD-21溝と同様に北東・南西方向に流れ、庄内期並行の土器が多量に出土している。

検出した遺構の内、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、溝や人溝を検出した遺構の方角が西部で検出した流路1と方向的に見合う点も特徴である。

3、東 部

55m地点から調査区の東端の87m地点までの間を「東部」にしている。遺構検出面は、標高52.8m前後で暗茶色上基盤層とし、弥生時代の生活面は中部と同様に耕作土床土によって削平を受けている。河川跡など砂礫層の堆積が目立つが、西部から中部に比べて砂礫層など流路の痕跡がなく、安定した基盤層を伴う微高地である。

弥生時代中期以前の遺構：60m地点で検出したSD-7（幅4m、深さ1m）大溝、80m地点で検出したSD-22（幅0.6m、深さ0.3m）溝がある。いずれも土器などの出土遺物がないため、弥生時代中期以前の遺構と思われる。

弥生時代後期：60m地点で検出した土器溜り遺構（径3m、深さ0.8m）があり、SD-7大溝を切って掘削されているが、遺構の下層から大和第V様式、遺構の上層から大和第VI様式の土器がまとまって出土している。また、70m地点にはSD-12溝（幅3m、深さ0.4m）があり北東・南西方向に流れる。弥生時代中期末・後期初頭の土器が出土している。

4、F・G調査区西部SD-17大溝出土土器

・SD-17上層出土土器

分割成形技法を伴う土器の底部（図28-3・4・6～9）、口径20cm、口頸部の立ち上がり19cmほどの口縁部を広口状に成形し、肥厚した口縁端部に竹管文を施した円形浮文をもつ長頸壺（図27-1）が出土している。いずれも大和第VI様式の前半期の土器と思われる。

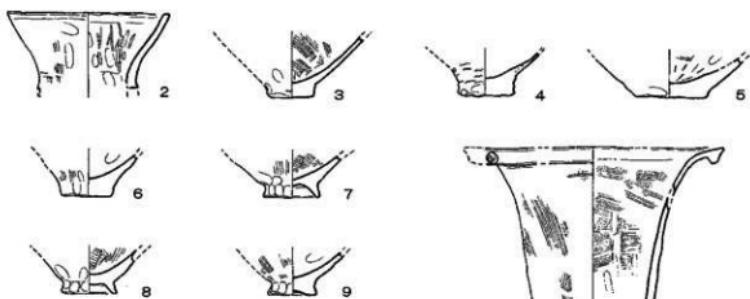
・SD-17下層出土土器

口縁端部を下方に肥厚させた口径21～22cmの広口壺（図28-10・11）、弥生時代中期の大和第III様式から第IV様式にかけて盛行する水平縁形口縁の高杯だが、口径16cm、水平縁径20cmのやや小形の高杯が出土している。広口壺の特徴から大和第V様式の土器である。

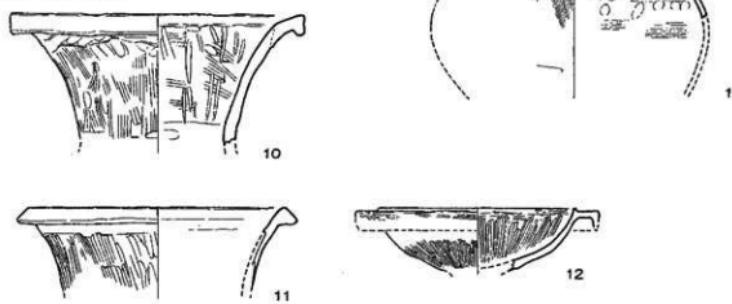
・SD-17最下層出土土器

口径10cmの短頸壺の口縁部（図28-13）、短く外反した口径20cmのくの字状口縁の甕（図28-15）、口縁部を受口状に成形した甕（図28-14）、やや厚手の甕底部（図28-16）、底部径12cmの高杯脚部甕（図28-17）、胴部に梢円形のスカシをもつ底部径12cmの小形器台（図28-18）などがあり、くの字状口縁の甕や高杯、器台などの特徴から大和第V様式の土器である。

FG-2区 SD-17上層



FG-2区 SD-17下層



FG-2区 SD-17層下部

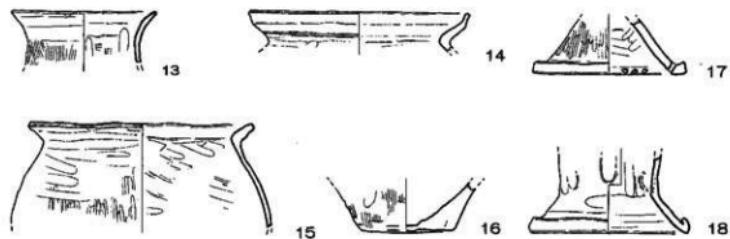
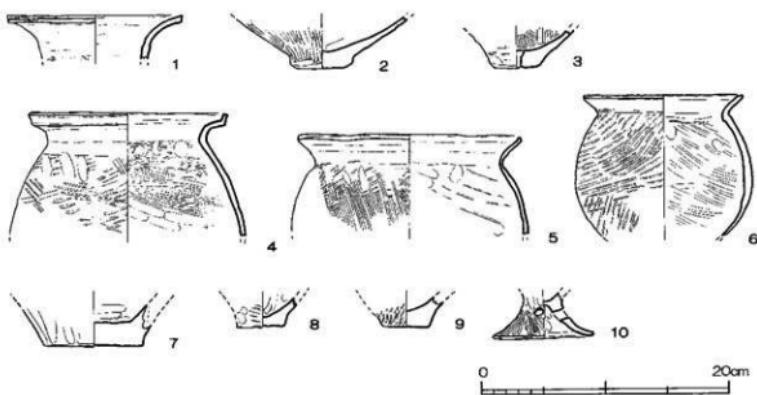


図28 F・G調査区 SD-17大溝出土土器 (S1/4)

FG-3区 流路1下層(上位)



FG-3区 流路1下層(下位)

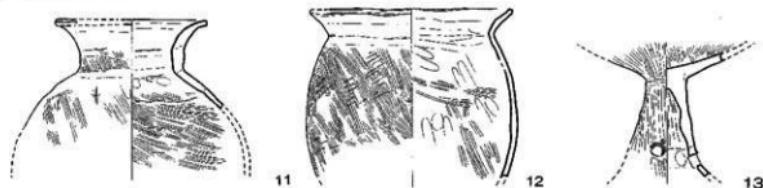


図29 F・G調査区 流路1出土土器 (S 1/4)

5、F・G調査区西部 流路1出上十器

・流路1下層出土上器

遺物の取り上げは、流路1下層を上位と下位に区別していたので、そのまま図化しておく。

器壁にやや厚みのある頭部から器壁を薄く成形しながら口縁部を仕上げている広口壺(図29-1・11)、同じく外面にミガキを施し胸部が強く張り出した壺の底部(図29-2)、タタキ技法とハケ調整を施した胸部に横ナデ調整で仕上げたタタキ壺(図29-4～6・12)、同じくタタキ壺の底部(図29-3・8・9)、鉢又は甕に施したと思われる脚部(図29-10)、外面をミガキ仕上げで調整した高杯の器受部及び脚部(図29-13)があり、典型的な弥生時代後期の上器形態であるが出上上器に長頸壺がなく、時期的に人和第VI様式末、弥生時代後期の末頃と思われる。

V. まとめ

第25次調査は、第1区～第12区の調査とF・G調査区の2ヶ所に区分して発掘を行っている。第1区～第12区の調査では、集落を区画する大溝と集落内部にある柱穴や井戸などを検出し、環濠集落の様相を示す資料である。また、F・G調査区は、平等坊・岩室遺跡の本体とは河川を隔てた東岸の微高地に所在し、弥生時代中期末～弥生時代後期・古墳時代初頭に至るまでの大溝や土坑、井戸など新たな集落

の遺構を確認したものである。

1、第25次調査地点の景観

第1区～第12区の調査地点とF・G調査区との間には、おびただしい砂礫を伴う自然河川の跡がある。ここでは、この河川跡を目安に第1区～第12区調査地点を「西岸微高地」、F・G調査区を「東岸微高地」と呼び、河川を挟んで両岸に遺跡が展開していた様子を説明する。この河川跡は、前述したとおり弥生時代以前から条里水田が形成されるまで長期に渡って流れていたもので、布留川水系の一部と思われる。東岸微高地は、現在の耕作面が西岸微高地よりやや高く、遺物包含層の削平の受け具合から、西岸微高地より東岸微高地の方が弥生時代の生活面は地形的にやや高く、安定した微高地であったと推測する。一方、第1区～第12区調査地点のある西岸微高地は、第13次調査地点のある集落本体が立地する微高地との間に第7次調査地点で検出した弥生時代以前～弥生時代前期の河川砂礫層があり、遺跡本体の微高地とは地形的に独立した環境であったと思われ、平等坊・岩室遺跡の南東部周辺は、複数の微高地と自然流路が流れる起伏ある地形であったことが分かる。そして、集落本体の微高地と西岸微高地は、その間を流れていた河川砂礫層が弥生時代前期後半には埋没し、前期末・中期前半以降になると地形的に一帯化する。

2、弥生時代前期の様相

第13次調査地点の遺跡本体の微高地、第25次調査地点の西岸微高地、東岸微高地があり、南北方向に流れる自然流路があつて起伏ある地形が展開する。第13次調査地点は、弥生時代前期を通して土坑など多数の遺構を伴い居住地であることが分かる。また、弥生時代前期後半（大和第I～2様式）にはSD-13大溝があり、第7次調査で検出した河川砂礫層の西岸に沿って環濠が区画されている。一方、西岸微高地は、第2区の弥生時代前期の方形土坑や第5区のSD 5-1大溝直下から検出した弥生時代前期砂

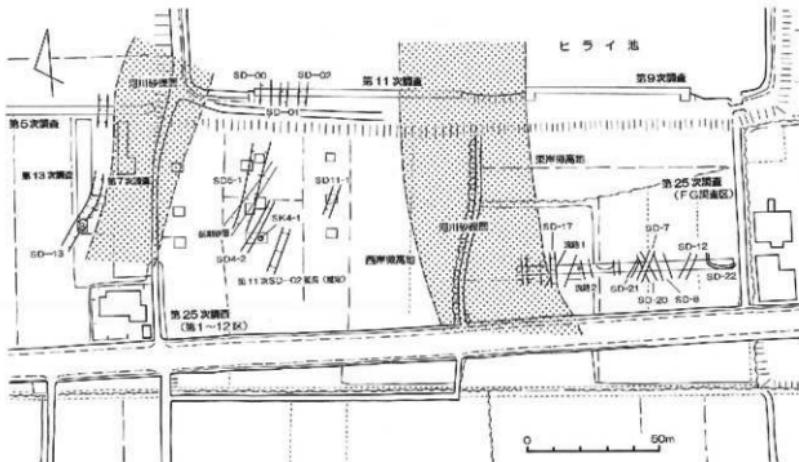


図30 第25次調査の地形及び遺構復原図

層の大溝がある。こうした遺構は、西岸微高地が集落本体の微高地とは自然流路を隔て独立した地形の中で出現したものなのか、自然流路が埋没し河川砂礫層の上面からPitや土坑が展開する弥生時代前期末において、地形的にも集落本体の微高地と西岸微高地が一帯になった状態で集落の領域が広がっていくことによって出現したのか興味深い点である。

東岸微高地は、弥生時代前期にかけて遺構はなく活動は見られないが、縄文時代晚期の突堤水上器（長原式）の破片が1点出土している。

3、弥生時代中期の様相

第13次調査地点の集落本体の微高地と西岸微高地が河川砂礫層の埋没によって地形的に一帯となり、西岸微高地が平等坊・岩室遺跡の集落本体に取り込まれるようになる。弥生時代中期前半は、SD 5-1 大溝、SD 4-2 大溝からなる環濠が西岸微高地に出現し、環濠を境に遺跡の本体側にあたる第1区から第3区は、土坑、柱穴、Pitなど居住域を示す遺構を伴う。また、環濠はそれぞれ掘削時期が異なり、SD 5-1 大溝は、弥生時代前期末・中期初頭に出現し、弥生時代中期前半の大和第II-3 様式まで環濠の役割を担うが、第III様式以降は庭地のような状態で残存していたようだ。調査では、第5区から大和第II-3 様式の上器がまとまって出土している。第11次調査のSD-00、第4次調査のSD-3 がこの大溝の連なりと考える。また、SD 4-2 大溝はSD 5-1 大溝の外側にあって5mほどの間隔を置いて第II-3 様式に出現する。時期的には、SD 5-1 大溝が環濠の機能を衰退させた段階に出現した大溝と考えるが、大和第III様式を通して環濠の役割を担い大和第IV様式には環濠の形跡を失っている。調査では、第4・7区から大和第II-3 様式未の土器資料を得ている。第11次調査のSD-01、第4次調査のSD-02は、この大溝と連なり、平等坊岩室遺跡の集落の東側を区画した弥生時代中期前半の環濠は、1条の大溝を基本に、旧態の大溝と新しい大溝が並行して区画されていたようである。

弥生時代中期後半は、西岸微高地に存在した環濠のSD 4-2 大溝に重複して井戸や土坑、Pitなどが出現する。中期前半に区画されていた集落の領域を示す環濠の形跡は失われている。

一方、東部微高地は、F・G調査区西部の流路2、同中部のSD-8 やSD-20など弥生時代中期末以前の遺構が出現し、平等坊・岩室遺跡に関連する動きと思われる。しかし、こうした遺構から出土遺物がなく居住地のような活動は認められない。

4、弥生時代後期～古墳時代初頭の様相

西岸微高地と東岸微高地があり、河川を境に独立した微高地が展開している。第11次調査SD-02大溝は、弥生時代中期末～後期初頭の土器が出上している。同大溝の状況から西岸微高地ではSD 4-2 大溝の東側に同大溝の延長が並行して存在しているものと思われるが、今回の調査では調査区から逸れている。この大溝は、ヒライ池の北西部、岩室池古墳の調査（平等坊・岩室遺跡第4次調査）で検出したSD-01大溝に当たり、平等坊・岩室遺跡東辺を区画する弥生時代後期の環濠と思われる。ただ、第11次調査では弥生時代中期末から後期初頭の土器が多数出土し、第4次調査では弥生時代後期の土器が主体となっている。おそらくは、弥生時代中期前半にかけて展開した第11次調査SD-01・第25次調査SD 4-2 大溝が埋没した後、その外側に沿って新たに掘削された環濠と思われる。しかし、古墳時代初頭にあたる庄内期や布留期の土器が出上する大溝が、西岸微高地では認められない。

一方、東岸微高地は、F・G調査区において弥生時代中期末から後期、古墳時代初頭にかけて遺構が活発に展開している。弥生時代中期末の大溝にはSD-12、SD-21があり、弥生時代後期初頭から後期にかけてはSD-17、SE-14井戸遺構などを検出している。さらに、弥生時代後期末から古墳時代初頭に

かけて流路1、SD-7など大溝がある。いずれも土器が遺構から多量に出土し、東岸微高地が居住地として展開している。これに類似した動きは、第18次調査で平等坊・岩室遺跡の北西側に立地する平等坊・岩室北遺跡において、平等坊・岩室遺跡の本体とは河川を挟んだ別の微高地があり、そこから弥生時代中期末と後期の人溝を検出している。

5、所 見

第25次調査では、平等坊・岩室遺跡の東辺を区画する環濠を検出した。弥生時代前期から後期まで連続と環濠の掘削を繰り返すが、集落の出現期にあたる弥生時代前期前半の環濠は認められない。環濠の出現は、前期後半の第13次調査「SD-13大溝」に始まる。その後、環濠の掘削は西岸微高地に移り、集落の居住範囲が拡大する。西岸微高地には、前期後半～前期末と思われるSD 5-1直下「前期砂屑大溝」が出現し、続いて弥生時代中期には中期初頭～中期前半の「SD 5-1大溝」、遅れて中期前半の「SD 4-2大溝」が展開する。弥生時代中期前半にかけて2条の環濠を区画するが、SD 5-1大溝はSD 4-2大溝が出現した時点すでに埋没が進み、窪地のような形状でSD 4-2大溝と並行して環濠帯を形成している。そして、第25次調査では調査区域から逸れていたが、弥生時代中期末～後期にかけては第11次調査「SD-02大溝」が出現する。平等坊・岩室遺跡と同様に奈良盆地の中央部に位置する山原本町の唐古・鍵遺跡では、弥生時代前中期から弥生時代後期まで1条の大環濠を主体に複数の大溝が区画され、時代を通して環濠で区画する集落の領域が変わることなく展開する。また、同遺跡は、広大な領域を集落にする一方で環濠の部分にはPitや土坑など生活遺構が重複せず、整然とした環濠帯を形成している。平等坊・岩室遺跡の東辺を区画する環濠は、時期ごとに掘削地点が変化し、埋没した環濠の外側に新たな大溝を区画しながら、環濠の本数は1条の大溝を基本とし、唐古・鍵遺跡の大溝と比較してやや小規模である。集落本体を中心に波紋を描くように環濠を形成しているが、埋没した環濠上にPitや土坑、井戸が重複し、環濠帯を犯しつつ居住域を拡大しているのがこの遺跡の特徴といえる。

そして、こうした居住域を拡大する画期として弥生時代中期末に始まる東岸微高地の大溝出現が上げられ、第18次調査における平等坊・岩室北遺跡の弥生時代後期の環濠出現なども関連する。弥生時代前中期から継続的に営まれてきた平等坊・岩室遺跡の集落本体が、居住域としては飽和状態となり弥生時代中期末～後期にかけて集落の外側にある微高地へ居住域を分散し展開したものと思われる。

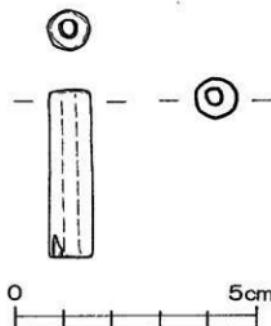


図31 第1区調査地点出土の管玉 (S1/I)

図 版

図版1 平等坊・岩室遺跡（第23次）

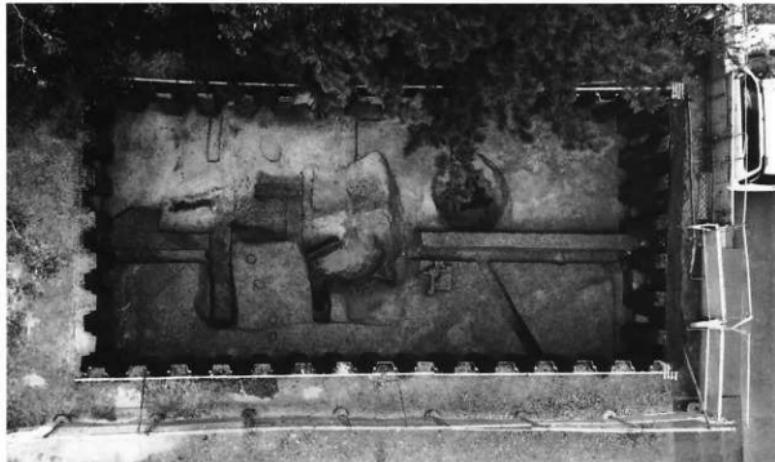
1



調査地遠景
(南東から)



調査地遠景
(上空から・上が北)



調査区全景
(上空から・右が北)



井戸SE01井戸枠矢板出土状況（西から）



井戸SE01井戸枠矢板打ち込み状況（東から）



土杭SK01土器出土状況（西から）



土杭SK01土層断面（北西から）



重機掘削後の状況（南から）



第Ⅲ層上面 検出状況（南から）



造成土および旧耕作土除去後の状況（西から）



第Ⅲ層上面 検出の素掘溝群（西から）



造成土および旧耕作土除去後の状況（東から）



第Ⅲ層上面 素掘溝群完掘状況（西から）



第2次調査区痕跡 検出状況（北西から）



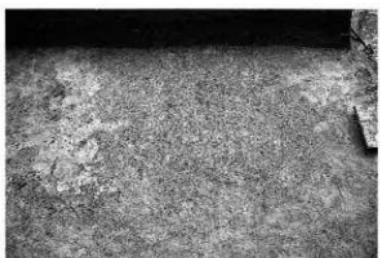
第Ⅲ層上面 検出状況（南から）



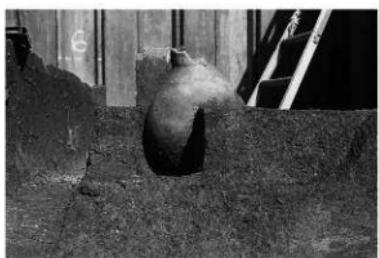
第IV層上面遺物出土状況（西から）



土杭SK01土器出土状況（東から）



井戸SE01検出状況（東から）



土杭SK01上層断面と土器（南から）



井戸SE01東半完掘状況（上が西）



第2次調査区痕跡の全景（南から）



井戸SE01完掘状況（北から）



井戸SE02完掘状況（東から）



溝SD01完掘状況（北東から）



溝SD02下面断ち割り状況（南東から）



溝SD01土層断面（北東から）



第2次調査区痕跡
南サブトレ北側の土層断面(南東から)



第2次調査区痕跡全景（東から）



調査区中央アゼ土層断面（南東から）



井戸SE01南端土層断面（北西から）





西調査区
遺構面検出状況
(北から)



東調査区
遺構面全景 (北から)



東調査区
遺構面全景 (南から)



東調査区
井戸SE01検出状況
(西から)



東調査区
井戸SE01枠内遺物
出土状況（上が東）



東調査区
井戸SE01完掘状況
(東から)



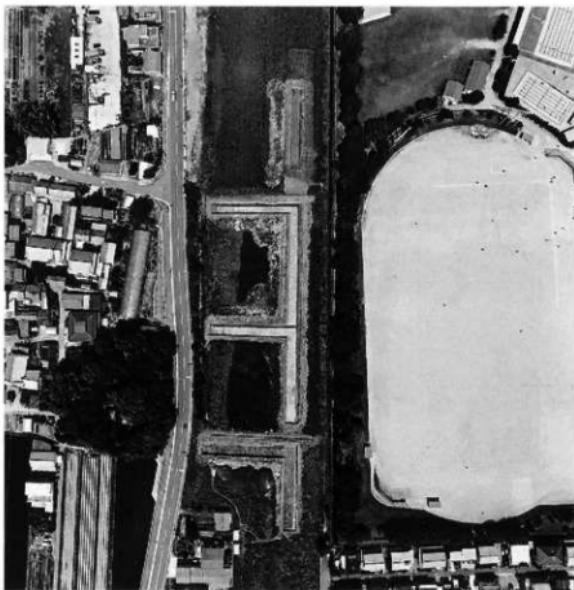
調査区南側全景
(北東から)



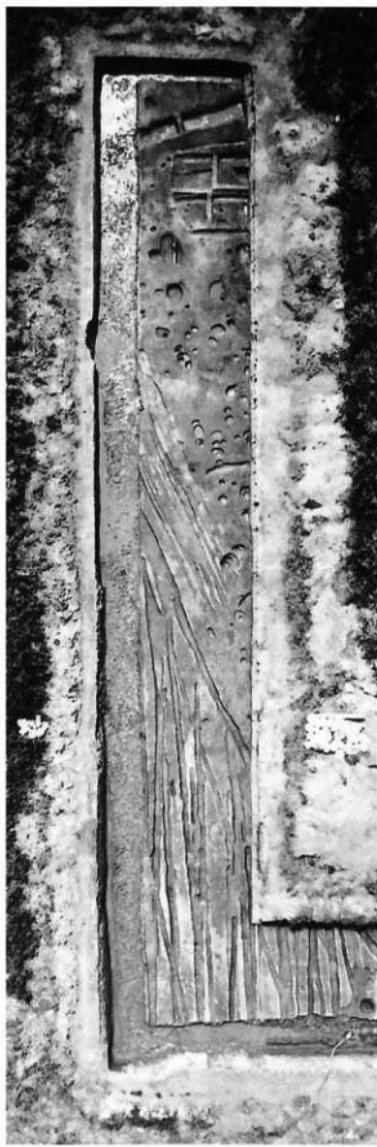
調査区南地区全景
(上空から・上が北)



調査地遠景
(北西から)



調査地遠景
(上空から・上が北)



NS1トレンチ全景（上空から・下が南）



EW1トレンチ全景（上空から・左が北）



NS1 トレンチ全景
(南から)



EW1 トレンチ西建物群 (西南から)

EW1 トレンチ建物群
(西から)



EW1 トレンチ西
北壁土層断面 (南西から)



EW1トレンチ西端
北壁土層断面
(南から)



NS1トレンチ南
東壁土層断面 (西から)



NS1トレンチ中央
東壁土層断面 (西南から)



薬師山3号墳
墳丘の現況
(北東から)



調査区の表土層除去後
(北東から)



調査区完掘状況
(北東から)



調査区西半・墳丘裾付近
(南西から)



調査区東端・墳頂部付近
(北東から)



調査区西端・墳丘裾より
下部 (北西から)



調査区南壁
墳丘裾部分土層断面
(北西から)



調査区東端付近
南壁土層断面と土器
(北西から)



調査地西側付近
炭焼窯設置場所
外周の土層断面 (東から)



第1区～第12区全景（上空から）